

324
281



久遠の基督教

明治
45. 4. 8
内交

卷頭の告白

予は本書に於て、基督教の眞髓を説かんとす。基督教の眞髓は、天父の心を心とする靈的生活に存す。古今東西、聖哲多し。雖此一義を體達したる者は、人類史上恐くは只二人のみ。一は十字架に釘けられたるナザレの耶穌其人也。耶穌の人格に現はるる神の聖なる愛に觸れ、信じて樂しみ、樂しみて生くる、是れ即ち基督教の眼目也。耶穌が身を以て啓示したる久遠の福音こそ、予は今學者の態度を取りて、歴史的に將

た批評的に之を論述せんとするにあらず。予は只自己の實驗に基き、聖書の啓示に照して、確信を披瀝せんと欲するのみ。予は今此一小著を、心誠に光を慕ひつつも、未だ開眼の喜びに逢はざる求道者諸君に獻ずるを以て、眞に一大幸福と爲す。

予は十四五年前内村鑑三氏の著書に依りて始めて基督教の光明に觸れ、痛く其精神に動かされしも、終に氏の神學に服する能はず、久しく基督教の門戸に迷ひぬ。若し當年の予にして、海老名禪正師の濶達雄大なる説教を聽かざらしめば、予は今猶ほ信仰の門外漢たりし

やも知るべからず。海老名師は予が半生の精神的指導者なりき。予は師に接する毎に、氣宇の開かるゝを感じ、過去十餘年間、師の教會の忠實なる信者として立ちぬ。只予の薄志なる、最近兩三年來、端なくも思想信仰の波瀾に逢會し、久しくその渦中より離脱し得ざるを艱みたり。

予は第一に近代思想の感化を蒙り、第二に東洋意識の壓迫に遇ひぬ。予は此二大思潮に盲目なる能はず、而かも予が基督教的信仰は、之を同化し終る可く、餘りに微弱なる者なりき。思想の統一と、生命の自得とは、予

に於て沈痛なる要求となりぬ。本書の緒説は其間の消息を述べし者、予が自覺と得信の徑路は此中に分明ならむ。予は耶蘇の人格に於て、受洗以來十有餘年、未だ嘗つて意識せざりし神彩の耀くを認め、始めてこゝに金剛の信を得たり。聖なる耶蘇の愛、予を救ふて自由を樂ましむ。予は近代思想を重んじ、又東洋意識を慕へども、ナザレの耶蘇に忠實なるを以て、最も光榮ある使命と爲す。

予は既に久しく第三王國を仰慕したりしが、今にして漸く此新王國の風光眼頭に鮮かなるを覺ゆ。智慧の

樹の上に建てられし王國と、菩提樹の蔭に建てられし王國とは、十字架の上に建てられたる王國と共に復活して、茲に新しき第三の王國を地上に現出し來らんことを。予は今既に業に其曙紅を認むる者なり。予は此曙紅を眺めつゝ、先づ十字架の根本王國をこゝに開顯せんことを欲す。本書は實に第三王國の市民たる予が信仰告白の第一聲也。

明治四十四年十一月廿四日

南湖の濱の松林に於て

鼎 浦 學 人

小序

一。予は本書を草するに當り、フライデレル、ハルナック、ブッセット、ヨハンネス、ヴァイス、サバチエー、サンデー、ガーヴネーの諸氏及び海老名、彈正師、姉崎正治氏、波多野精一氏の著書に負ふ所多かりしも、書中一々之を明記せず。予は以上の諸氏より或は基督教に對する根本の見解に就て、或は聖書の見かた、若くは解釋に就て、從來少からず學ぶ所ありしが、本書の特色とする部分は、寧ろ獨斷の嘲を厭はずして、予一個人の私見を披瀝したる者なり。

二。予は専ら共觀福音書(馬可、馬太、路加の三傳)に即して、耶蘇の教訓及び人格を説き、約翰傳に就ては多く語る所なし。是れ全く共觀福音書の史的價値を重んずるが故也。而かも予は約翰及び保羅の

信仰が、共観福音書に現はれたる、耶蘇の福音を、根本的に一致する事を確信する者なり。予は本書の中にも、折ふし之を指摘し置きたるが、予は、約翰傳第十四章、若くは羅馬書第八章の思想を、確かに耶蘇の正意と信じて愛誦措かざる者なり。予は又特に本書の讀者諸君が、少くとも哥林多前書及び約翰第一書に日夕親しまんことを慫慂す。

三。本書の「緒説」は、一見「本論」の内容と直接の交渉を缺くが如き觀あるも、得信の徑路を語るは、畢竟福音に對する予が見解の背景を示す所以なれば、予は寧ろ必要と信じて之を叙述したり。此の緒説は、予が將來に於ける宗教的著述の全體に至る總序とも見る可き者なり。

四。「本論前後の二篇に分ち、各篇を五章宛に分ちたるが、一章僅かに二

十頁に満たざるもあり、又或は五十頁を超ゆるもあり、長短一様ならざるも、主として論理の必要の上より斯くは區分しぬ。繁簡體を得ざる亦止むなきに出づ。

五。予は喜んで讀者の質問に應せんと欲す。若し公開を便とする時は、「新人」若くは「六合雜誌」の紙面を藉りて應答する事もあるべし。予は本書を通して讀者諸君の心情に觸れむ事を切望する者なり。

著者

目次

緒説

予が踏み來し道

.....頁 一—〇四

- 一、予は渾沌の子なりき——
- 二、靈肉の抗爭——
- 三、全的要素——
- 四、樂園の幻夢——
- 五、自覺の悲哀——
- 六、欲望問題——
- 七、釋尊の踏みし道——
- 八、永遠の否定——
- 九、最高靈覺——
- 十、視よ是れ此人也

本論

前篇 耶穌の福音

第一章 神の國の福音 …………… 一〇五—一二一

- 一、神の國とは何ぞや——二、神の國と其義とを求めよ——
- 三、耶蘇の歩める超越道

第二章 神の國の性質 …………… 一二一—一三三

- 一、神の國の現實的社會的意義——二、神の國の純精神的性質——
- 三、神の國は最高價值なり——四、神の國は進化發展する生命なり——
- 五、神の國は精神的感化力なり——六、神の國は内的自由なり——
- 七、神の國は恩寵の賜なり

第三章 神の國の奧義 …………… 一三三—一三八

- 一、三世一貫の靈的生命——二、耶蘇は神の國なり——
- 三、耶蘇と神

第四章 三福音書に現はれたる神國思想 一三九—一八五

- 一、耶蘇は猶太思想を超越す——二、神の國は既に顯はれたりとの思想——
- 三、神の國は忽然現はるべしとの思想
- 四、兩思想の根本的一致——五、審判の日の意義——
- 六、歡樂の日の意義——七、神の國は爾曹の衷に在りとの思想

第五章 神の國の法則 …………… 一八五—二〇二

- 一、二大法則——二、二大法則を超越せる原理——
- 三、耶蘇は即ち法則なり——四、信望愛

後篇 福音の真髓

第一章 予が開眼の聖訓 …………… 二〇三—二一九

一、人生最高の祝福——二、清き心とは何ぞや——三、神を見ることは何ぞや——四、心清ければ神現はるの消息

第二章 聖霊（見神の福音） …………… 二一九—二六五

一、純潔なる精神——二、耶蘇の體現せる純潔の理想——三、得んと欲せば先づ棄てよ——四、心の貧しき者は福なり——五、富める青年の悲哀——六、物語を解する鍵——七、耶蘇は何事を否定せし乎——八、一切を棄て、聖霊

緒 説

予が踏み來し道

一、予は渾沌の子なりき

予は生れながらにして渾沌の子なりき。

稀世の夢覺めやらぬ少年時代より、光と暗と靈と肉とは、予が心の中に

圓の哀歎常ならず善惡明かならぬ情緒と意思とを懐きつゝ、予は渾沌

の間を彷徨したり。若し予にして爾等目を醒まし、堅く信仰に立ちて、

丈夫の如く剛かれてふ天來の師子吼を聴かざらしめば、予は只一個の

可憐なる煩悶兒たるに終りしならむ。何等の恩寵ぞ、予は天と人との

愛を享けて、茲に金剛の信を得たり。三十年來、渾沌未分なりし世界と人生とは、今しも予が前に在りて、靈彩陸離たる光耀觀を現せんとす。予はそも是れ何物なりしか。人は各々分つ可からざる個インデグ・ヂュアリチー性を有すといふ。されど少くとも予一個人は、果して如是の個性ありしか、予は今にして猶ほ之を疑ふ。予が本來の性格は、分つ可からざる者と謂はんよりも、寧ろ自ら分るゝ者なりき。實に予が性格は完全なる圓にはあらずして、全く一の楕圓なりき。二つの中心は絶えず互に吸引し、又絶えず互に反撥したり。然り予の如きは、幸にして平調を保てる一種の二重人格ならん歟。性格の分裂は、隠れたる予が心の悲劇の根本原因と謂ふ可かりき。哲人は叫びて曰ふ、インデグ・ヂュアリチーを發揮せよと、而かも予はインデグ・ヂュアリチーを求めて、而して猶ほ之を得ざる者なり。若し予にしてインデグ・ヂュアリチーを有すと

せば、そは實に分裂せる性格其者是れなり。予は之を以て終に誇りと爲す能はず、予は之が爲めに歎き苦しむこと既に久しき者なれば也。されば予は個性を發揮せんよりも、先づ性格の統一を以て、予が最深の要求と爲したり。渾沌の子たりし予が信仰の一路に進めるは、全く止まんとして止む可からざる此要求の衝動に因る。予は幼にして詩歌を好み、即ち或時は心竊かに詩人たらんと志しぬ。而かも一念奔放直ちに詩國の領土を開拓す可く、予が心は餘りに現實の舞臺を慕へり。予は詩歌を好むと殆んど同一の程度に於て、天下の廣居に精彩を放てる國士の英姿を欣びたり。即ち或時は心竊かに經世家たらむと志しぬ。予は二兎を追うて今しも岐路に立てる獵夫の如く、中學を出でんとする前後頗る躊躇煩悶せしが、プラトーンを論じたる古人の文を讀みて、一轉哲學者の高風を思ひ、こゝに詩人たり經世

家たり同時に夫れ以上たる可き大望心を發しぬ。可憐の少年なりし哉予は斯の如きアムピションを以て哲學を修めんと期したりしが、帝國大學の哲學は、可憐の少年を満足せしむ可く、餘りに煩瑣にして凡俗なりき。大學に失望したる予は、進んで渴ける精神を何物によりて醫す可かりし乎。古今東西賢哲素より乏しからず、予にして獨往の意氣あらば、大學の講堂に満足せずとも、師友を世界に求む可く、毫も餘地無きを苦しまざりしならむ。而かも凡骨の予は、泉を脚下に求むるの哲學者たること能はざりき、又少年の夢を趁うて、半生吟詠を事とせんに、既に情緒の荒めるを奈何。一たび詩國に入らんとせし予は、今や轉じて學者たらんと思ひぬ。學者たらんとして、猶ほ學究の道を濶歩し得ざりしは、翻つて天下の廣居を慕ふ一點の熱火燃えて止まざれば也。大學を出でむとする前後の予は、斯の如くに獨り迷ひしが、只偶然の動

機に縁りて、圖書館に眠りし白面の一書生は、端なくも銀座街頭の新聞編輯局に現はれぬ。素より確信の結果ならざりしが故に、記者生活の六七年間、予は絶えず性格の矛盾に苦しみ、如何にしてか之を脱却して、徹底的に自ら満足する新生活に入らんと願ひぬ。誰か此間の苦悶を知らむ、渾沌の子は時として自らの性格を咀ひたりき。

バイロンの奔放を愛し、ゲーテの偉大を慕ふと同時に、グラッドストンの生涯を欽し、セシル・ローズの覇圖に酔ひし若き空想の兒たる予は、街頭に立ちて何事を爲さんとか志したる。青年記者の夢は、雲を捉ふるが如き者なりき。功利を目的としたる多少の計畫は、皆水泡と共に消えたり。何が故に空しく消えたるか、蓋し予は何事に向つても、全心を傾倒する熱情を有せざりしが爲めのみ。熱情なきにあらざるも之を一事に集中せしむるの意志を有せざりしが爲めのみ。意志の分裂は

予に於て不斷の憂患なりき。斯くて予は街頭に在りて書齋を戀ひ、書齋に在りて街頭を戀ひ、彼と是とを來往して久しく安住する處を知らず、記者としては迂濶に、學者としては淺薄なる、極めて不満足、不愉快、不見識なる生活を送りぬ。是れ抑も誰が爲めぞや、決して他人の爲めにあらず、只自らの爲めなりし也。然り何人の檢束もなきに、予は予が性格の故を以て、此の如き苦悶を重ねしのみ。愚と謂はん乎、痴と謂はん乎、自ら憐れむに堪へたりと雖、性格其者を如何かせん。予は幾度か之を反省して、自ら救ふ所以の道を求めぬ。

思ふに予が煩悶斯の如くして三十猶ほ自立する能はざる者は、人生の根本意義に就て惑ふ處淺からざれば也。「われ人の世に生を享けて當に何事を爲す可き乎、假令天壽を全うし得ずとも、願くは最善の生涯を送らむ、而してその所謂最善の生涯は、是れ抑も如何の生涯ぞ。」予は此

の疑問を抱いて既に久しき年を経たり。生活は必ず思想に先つ。予は未解決の儘なる疑問を擁して、その日々を生活し來れり。生の情味に徹すると、生の意義を悟ると、孰れか先にして孰れか後なる、予は明かに之を知らず。只予一個人に於て、生の意義を悟り得たりとせば、生の情味に徹するも亦難からじとのみ思惟したりき。予は性格の矛盾に悩むこと漸く深刻なるに従ひ、人生の根本義を捉へんとする熱情の燃ゆることを覺えたり。予にして人生の根本義を捉へんか、予が性格は始めて歸一の目標を得む、斯くて予は多年の苦悶を超越し、自由の天地に悠遊するの大歡喜に逢ふを得んとは、予が切なる祈願なりき。予が人生問題に没頭し始めたるは、全く如是の動機に出づ。決して單なる智識の欲求にはあらずし也。彼の理性一偏なる哲學者の所謂人生觀の建設といふが如きは、予に於て與り關する所にあらず。予は予

が地上に於ける生涯を意義ある者たらしめんが爲めに、更に直截に言へば、予の自ら満足なりとする生活、其者に觸れむが爲めに、即ち自己の問題として、生命の問題として、予は人生の意義如何を思索し始めたる者なり。

本來人生哲學は、是の如き要求に根ざして、是の如き要求を満す可き使命を有する者ならむ。されど予は哲學者の何人に於ても、この崇高にして深遠なる使命の充足を見出さざりき。予はカントを大なりとし、プラトーンを神々しと感ずること、猶ほエマーソンの如く、シヨッペンハウエルの如し。此二大哲人こそは予が生涯の師傅にして、予は永しへに思想の泉を彼等に汲まんを欲する者なり。されど是等の哲人に於てすら、予は予が問題の解決を庶幾し得べしとは信せざるなり。予はプラトーンとカントによりて救はれたる農夫あるを聞かず、されど

佛陀と基督との前に、能くその光榮を失はざる賢哲は果して誰人ぞ。

予は思想を求めて哲學に行く、而かも生命の流を汲むべく、古聖の宗教を外にして別に清泉あるを知らざる者なり。予が人生の意義を尋ねて、哲學に歸らず宗教に入りしは、素より易行道を好む弱者の群を追へるにあらず。宗教の中にこそ、哲學以上の啓示ありと、確信すべき理由を見出したれば也。

渾沌の予は斯くして宗教を學び始めぬ。彼は何等かの機縁によりて、基督教を渴仰したり、渴仰年久しうして、自ら多少得る所ありと公言して憚らざるに至れり。されど彼が心の奥底には猶ほ大なる空虚ありき、猶ほ大なる暗黒ありき。基督教の奥義に就て、考察の漸く進むに従ひ、疑惑と信仰とは相並びて日に月にその深さを加へぬ。信の一路を辿りつゝも、心の動搖は止まざるなり。あはれわが性格の病根も亦執

物を極めたるかな。

二、靈肉の抗爭

予が眼に映じたる最初の基督教は、全く品性の宗教なりき。予は五六の青年信徒と交りて、その品性の高潔眞摯なるに感じ、且つその克己心と自省力との深く鋭きに服したり。一般の學生仲間にて、彼等は獨特の光を放てり。彼等は時として信徒ならぬ他の同窓と、異なる星辰の下に住み、異なる世界の空氣を吸へるかと思ひ、予をして怪しましめたる程なりき。予は超然として塵を脱したる彼等の品性を敬慕せり、予の基督教會に入りし最初の因縁は是れなりき。

若き信者の多くは、罪の意識に鋭かりき。罪とは本來何ぞやと問はば、何人も答ふるに躊躇すべし。されど彼等に取りて、それは直覺の問題な

り。酒を飲まず、煙草を吸はず、骨牌を弄ばず、演劇を見ず、彼等に在りては克己即ち宗教なるに似たりき。予は久しく此の道を辿り來れり。靈に就ける者を崇み、肉に就ける者を卑しむ、人の世の歡びを棄て、神の國の樂しみを求むべしとは、吾等が教師の説法なりき。斯く思ひつつも斯く行ふこと能はざりしは、素より茲に謂ふ迄もなし。されど青年時代の湧き立つばかりなる熱血は、屢々洪水の漲るが如く、信の城壁に殺到し來つて、之を蹴破らんとしたりしかど、予は敢然として踏み耐ふるを信徒の光榮と感じたり。予は今に及んで猶ほ之を稚なかりしとせず、如是の修養は、心中の賊を夷ぐ可き大丈夫の本領に適へば也。されど予は敢て告白す、不幸にして大丈夫の本領は、薄信の能く支へ得る所にあらざる也。神を求めて未だ神に逢はざりし青年信者は、内心の闘ひ半ばにして、肉の反抗に堪ゆる能はず、白旗を掲げざりしは罕な

りき。予の如きも其一人也。

猛烈なるは肉の反抗なる哉、幾多の聖者求道者が、爲めに心血を流ぎ盡したるを見ずや。寔に肉の力こそは遺傳の精髓其者なり、そは幾十萬年の昔、人と獼猴と虎と獅子と猶ほ親友なりし日より、血脈に傳へたる本能の力なり。この力の湧き出づるを感じては、誰か荒野の獸に歸りて、心の飢えを醫さる可き。肉の反抗とは、畢竟吾等人類が、驕慢の夢より醒めて、獸の友たるを自覺しそめたる驚愕の叫びのみ。

肉の反抗に逢へる青年の多くは、性情忽ち一變して、靈を嘲ける裏切者となるを常とす。予は本來二重の性格を有するが故に、裏切者たる勇氣なかりき。されど自らを辯護し得ずしては到底不安に堪へぬ予は、肉の反抗を是認す可き新しき論理を案出せんとしたり。予は實に獸の友たるを自覺せり。されど予は進んで人の人たる所以を肉の要求

に認めんとしたり。斯くして肉の一語を罪の代名詞と心得し予は、始めて兩眼の開けるを感じ、靈の秘密を思ふと一様に神聖なる心地を抱いて、肉の價值を知らんと欲しぬ。一層適切に言はば、當時の予は猶ほ未だ靈の何たるやを知るに至らず、而して夙くも肉の力を悟り初めたる也。

老いたる宣教師の宗教は、いかでか肉の文明を愛する青年の心を繋ぐに足らん。酒の香を嗅かざるも可、役者の顔を見ざるも可、されど小説は虚偽を書けるが故に讀む可からず、聖書の傳説を描ける者ならずば、名畫も奪しとするに足らず、俗語を謳ふは罪なり、宜しく讚美歌を唱へよ、食前の祈りを爲さるは獸の類ひのみ、されど茶菓を喫せんには斯くせずとも可なり、といふが如きに至つては最早敬虔の罅を超えて滑稽の域に入りし者、異教徒ならずと雖反抗の感なきを得ざるべし。あ

はれ肉の要求なる者は斯くも卑下し果つべき歟。予は改めて聖書を讀みぬ、而して保羅其人が、靈と肉との關係に就て、沈痛なる苦悶を嘗めしを知れり。彼は極めて深酷に、肉體を靈魂の牢獄と感せる聖者の中の隨一人なりき。而かも之と同時に彼は、肉體を神の宮と悟りし覺者の中の第一人なりき。吾等は今如何に之を解釋すべきか、少くとも當年の予は、靈に於て徹する處なかりしが故に、肉體を牢獄と感ずる程の深酷なる經驗には觸れざりき、否、靈の存在を意識するばかりに、肉は自在を失へるに非ずや、靈魂こそは肉體の古き專制君主なりとは、予の詐らざる歎聲なりき。而して未だ肉體が神の宮なりてふ一大秘義を徹底的に感悟し得ざりし故に、予は無謀にも神の心に反抗してなりとも、肉の權利を主張するの必要ありと思惟したりき。

人は靈のみにて活くる者にあらずとは、反抗者の標語なり。然り、人は

パンの要求を有す、否、夫れよりも一層廣く且深き意味に於て、吾等は肉の要求を有す。靈に囚はれし人はいざ知らず、自由の人として考へよ、吾等が生の情味なる者は、抑も何處にか在りとする。吾等は五つの官能を離れて、生の情味に觸れ得るか。口あるが故に味ひを識り、之に依りて生を養ふにあらずや、眼あるが故に物を視、之に依りて萬象と親しむにあらずや。官能を卑しみて恰かもその不具なるを厭はず、その恩恵を感せざるが如く高言する者は、虚言者にあらずんば即ち低能兒のみ。又假令官能を卑しむに至らざるも、耳を有して耳の感じ得べき微妙の音と調べとを味ひ得ざる者は、之を何とか言はん、口を有して口の感じ得べき精緻なる味ひを解せざる者は、之を何とか言はん、彼等を呼んで官能上の不具者乃至は野蠻人と謂ふ必ずしも過ぎたりと爲す可からず。生の情味は、先づ五感の與ふる所を、享樂するに依りて解せら

るべく、藝術、學問、遊戲、社交、其他一切の人文と自然との興味は、要するに此官能の開発を通して、始めて徹底し得べきなり。茲に豊富なる人生あり。文明の生活と稱するものは、畢竟肉の快樂と感ずる總ての要求を具體化し現實化したるに過ぎざるなり。此の人性を侮蔑して、肉の要求を罪惡視するは、是れ中世紀文明の殘滓を食める僧侶階級の迷信のみ。今の世に於て靈の價そも幾何ぞや、肉の權威は、當に個人と社會との主宰的地位に立つ可き者なり。生存と其の快樂との問題の前に、は、靈の命令の如き、忽ち青醒め果てなむのみ。

嗚呼予は何人より教へられしにもあらで、或日或時、斯の如き思想を懐くに至れり。危機は當に一髮なりき、予は信の高嶺の絶頂より、今しも快樂主義の裾野に向つて轉び落ちんとはしたりし也。而かも鞅鞅の如き予が性格は、此危機より自らを救ひ止めぬ。予は寧ろ喜んで轉び

落ちんと欲したりしも、その刹那予が細首の既に業に鐵鎖に繋がるゝを悟りたり。斯くばかり肉を慕ひし予も、醒むれば靈に囚はれし奴隷の身にてありける也、予は今特に奴隷といふ、自覺なくして囚はれ居たれば也。されど予は奴隷の境遇に満足すべく餘りに自由を愛したり。今しも此身の知らず識らず、鐵鎖に繋がるゝを悟りては、更に新しき煩悶の壓迫し來るを覺えざらんや。信仰はその後漸くにして復活し來れり、即ち新に靈の權威の犯す可からざるを感じそめぬ。されどあはれタンホイゼルは一たび肉に降服して、ヴェヌスの洞窟の歡樂を嘗めたり、エリザベットの清き眼に靈の耀きを感じたる今も、肉の價は死なりてふ保羅の苦き斷言は、遂に不可解の謎なりき、否、時としては之を一種の囁語とさへ悔りたりし也。

靈と肉との戦争の故に、わが心は荒野の如くなれり、多感なること予の

如きもの、奚んぞ長給忍ばんや、予は奮つて活路を求めずんば止まざらんとする決心を固うしたり。

三、全的要求

一たび靈の權威に撲たれて、克己即ち宗教の生活に入りたりし予は、轉じて肉の反抗に従ひ、快樂主義の價値を認めて、こゝに靈肉の二君に仕ふる苦しき立場に陥りたり。如何にしてか此境涯を脱却すべき、是れ予が多年の問題なりき。

或時予は斯く思惟するに至りぬ。曰く、靈に仕ふるとは何ぞ、眞と美と善とを以て、人生の第一義と見る是れ也。肉に仕ふるとは何ぞ、生慾、名譽、財貨乃至權勢を人生の第一義とする是れ也。予は靈の生活を崇高にして、永遠の價値ある者とは信じながらも、同時に肉の生活に執着す

るを禁する能はず。即ち一心兩面の要求を併せて共に満足すること人間生活の真相を得たるに庶幾しと。世人の最大多數は、恐らく斯の如くに思惟して、毫も怪しむ處なからむ。されど予が胸底には一點不安の念を除却し盡す能はざりき。何等か自ら知らざるの火ありて、心の奥に燃えなんとするを感じぬ。只斯く靈と肉とを同等に評價し、兩者に併せ仕へて、幸に心内の鬭争を融和し得んと期待したる也。當時の予は之を以て予が性格の生み出せる全的要求に外ならずと考へ、此要求の満足を「靈肉一如の人生觀」に見出したる。所謂靈肉の一如觀は、之を今日より見れば、一種の妥協論折衷説に過ぎざりし也。されど予は此妥協を妥協と思はず、眞に靈肉を一心に融和し得たりと思考して、其頃一小論文を書きぬ。過ぎ來し道を追想する爲め、左に之を採録せん。

「宗教とは何ぞや」人の靈魂に於ける神の生活是れ也」(The life of God in the Soul of Man)とは英國古名僧の道破したる所にして、多くの思想家が屢々引用する一箇の佳言也。而かも「調和の人生」の著者クラレンス・ラスプリー氏は之を非難して、宗教の真髓は最早是に止らず、人は肉體と智識とに於ても、亦神の生命を體達せざる可からずと論じ、且つ曰く、言語學的に言へば、健康は即ち完全を意味し、完全は即ち神聖を意味す(Health = Wholeness = Holiness)。由來人體の構造は、旋律的音樂的にして、幾多の能力と感覺との美しき樂譜を作れる者なり、譬へば千條萬線の集りて一大風琴を成し、中心の主音に結合せられて、微妙の調を出すが如しと。復た曰く人體は愛の詩なり建築なりと。此思想に就ては多少の異論もあらん、さりながら其眞實を否認し去るは、何人も難しとする所ならん。近世思潮の謳歌者は、ラスプリー氏と

共に、眞宗教は畢竟健全を意味す、その最も明白なる定義はと問はゞ「靈と肉との聖淨剛健なる成熟是れ也」(A divine and vigorous bloom on body and Spirit)と道破するに躊躇せざるならん。靈肉一如の人生觀は、蓋し近世思潮の開發したる甘美の華實なれば也。

靈魂の肉體を離れて存在するや否やは、今も猶ほ古の如く、一種の謎也秘密也。然れども吾人の生存する間、呼吸の斷續する限り、吾人は靈魂と肉體との我に於て一なるを知る。現世の我は單なる靈魂のみにあらず、靈魂の象徴せられたる具體せられたる五蘊の融合體なるを知る。又單に肉體のみにもあらず、肉體の中に潜在し超越する靈活の統一力あるを知る。現世の「我」は、死後の生涯の如何に拘らず、兎も角も靈肉同體の中に、其生存を自覺する者なり。是れ萬人共通の經驗にして、疑を容れざる事實なるも、他の半面を窺へば、靈肉は必

すしも調和する者にあらず、同體の中に在りながら、動もすれば互に
睽離し、反目し、衝突し、宛ら仇敵室を同じうするの觀無きにも非る
也。内心の分離と云ひ、靈肉の闘争と云ひ、是亦萬人共通の經驗にし
て、疑を容れざる事實なりとす。達人に非るよりは終に能く此境涯
を脱する能はず。靈肉同體にして而かも互に相闘ぐ即ち我は二元
に分れて、殆んど適歸する所を失はんとす。茲に於てか古來の道德
家宗教家は之が爲めに深く心思を傷ましめ、千辛萬苦を経て、僅に此
矛盾衝突を調和融會せしめ得たり。先人悟達の歴史得信の徑路は
要するに靈肉の闘争と調和とを記録したる者也。人誰れか生れな
がらにして圓滿具足の大人たらんや、神と人とに愛せられ、正心身健
やかに生ひ立ち給へるナザレの耶穌基督すら曠野の試練は終に免れ
給はざりし也。世々の聖者賢哲、心眞に神を求むる者、亦一人として

靈肉闘争の悲劇に遭逢せざるは無かりき。使徒ポロの如きは、素
と是れステパノを毆殺して、快哉を絶叫せる程の剛快なる熱情漢也、
悔改は彼に於て如何に莊嚴の悲劇なりしぞや。羅馬書全部を通じ
て、吾人は明かにポロの靈肉激闘史を讀み得べし。彼に於て靈は
光なり、命なり、肉は罪なり、死なり、我自ら心にては神の法に服ひ、肉に
ては罪の法に服ふなりとは、彼が慘憺たる實驗の餘瀝にして、婚姻す
らも本來彼の喜ぶ所にからざりき。ポロに在りて靈と肉とは、遂
に和合する能はざる仇敵として存せし也。予を以て見れば、彼の偉
大と明智とを以てして、猶ほ且つ二元論者の範疇を超越し得ざりし
也。中世の教父哲學と僧院制度とは、亦明かに靈肉の根本的調和を
遂げ得ずして、肉體のあらゆる要求は、神嵐の前に全く穢れたる物な
りき。然れども是れ豈に人生本然の眞面目ならんや。歡樂を現實

に求むる希臘民族の生活は、その神話と美術と理想とを以て、新に復活の春に逢ひ、やがてルネッサンス文化の氣運當る可からざる勢となりぬ。總て是れ眠れる者を醒し、囚はれたる者を放たむとするエマンスペーション・ムーブメントなるも、一言之を掩はゞ、肉體に屬ける者の權威と價值とが、その潛勢力を煥發し來れる者也。即ち人の生活に於ける靈魂の專制政治に對して、肉體が叛旗を掲げたる也。肉體に屬ける者とは何ぞ、五感に根ざせる快樂是れ也、自然に對する興味是れ也。此二つの者の權威と價值とは、實に廣大無邊と謂ふべく、近世文明の花は、全く此一思潮より開き初めたる也。而かも十九世紀の終期に至つて、歐米の人心は、再び一大苦痛を自覺するの止む無き境遇に陥りたり。文藝復興、宗教革命の頃に於てこそ、彼等は靈魂の專制——實は教權と無智との專制——に囚はれたれ、今日に及

んでは肉體に屬ける者の專制が、寧ろ却つて人心の一大繫縛となり、所謂物質文明の弊害殆んど堪ふる能はざらんとす、加ふるに心的科學の進歩は、靈肉調和の傾向を示したれば、人は漸く中道を知るの新識見を得んとはする也。即ち靈肉二元の思想は、近代の人の到底満足する所にあらず、靈肉一如、二つの者の調和に於て、人生の快樂を求めむとする思想は、自ら勃興せざるを得ず。保羅神學の根本價值は、この近世思潮に依つて煩はさるゝ所少しとするも、肉に屬ける一切を藐視して、罪なり死なりとするの思想は、根底より顛覆し終りたり。ラスプリー氏が宗教の定義の如き甚だ平凡なるに似たれど、實は頗る清新の意義を其中に寓せずんば非る也。』

予が此文を草したりし當時を顧みるに、予は靈肉の一如觀に於て、單に思想上の知的満足を得たりしのみ。予の情意は依然として分裂の狀

態に在り、予が行動は徹底的に調和せる靈肉一如の要求に出づるに非ずして、實は調和を求めんとする知的標準はありながら、此標準に順從せざる矛盾せる情意の發表に過ぎざりし也。即ち靈肉一如觀は、予に於て單なる思想上の見解にして、眞に色體體達せる實驗的の信念には非ざりき。噫、予は自ら徹底すを信する程に、靈肉の一如を證悟し得る迄には、そも如何ばかりの慘憺たる苦痛を嘗めたりしを。予が前掲の文に於て、保羅が肉に屬ける一切を藐視して、罪なり死なりとするの思想は、根底より顛覆し終りたりと斷言せる如きは、實に少年の心を以て聖者の衷情を付度したる僭越無思慮の放語なりき。當時の予は「肉の價は死也」て保羅の沈痛なる宣言を、明瞭に理解し得ざりしなり。保羅の嘗めたる生存の苦痛のせめて一点滴なりとも味ひ盡さずしては、斯の如き判斷を下す可きにあらず。予は今に至りて猶ほ之を古人に

愧づ。……
遮莫前掲の小論文は、次の如き語を以て全篇を結び。當時の予は肉の價値を高調し來りて、一種の新じき感動に觸れたる者の如く揚言せり、曰く。……
「獨逸ロマンチヤク派の天才ゾヴァリスが有名なる警句、世界に唯一の神廟あり、人の肉體是れ、肉體は觸るべし、神は觸るべしなり」の語は實に靈肉一如の思想を最も詩的に發表する者なり。是れ聖書に記して、爾等は神の宮なりと云へると、詮じ來れば一様の旨趣に歸せむも、聖書の立意は猶ほ靈肉を引き離して思惟せる痕跡なきに非ず。ゾヴァリスの警句に至りては、肉體即ち神なりと、電光影裏、直ちに眞實を寫し來るの概あり。深く此句を味ひ、無限の興趣油然而生して湧起せざる能はざる也。予は端なく此句を想起して、心に深く感ず

らくわが憂は本來心の病に在り、肉體の健康は未だ嘗つて多く思を煩はざりし也。而かも今や肉體即ち神廟なるを知る、豈愕然として驚歎せざらんや。肉體の健康を保つ可くして猶ほ且つ之を保たざるは、精神の健康を求む可くして猶ほ且つ之を求めざるを全く一様の罪なり。肉體豈輕んず可けむや。之に仕ふるは神に仕ふる也。之を養ふは神を養ふ也。靈肉素と一如、一如の中に圓滿なる「我」を顯現せしむるこそ人生の修養なれ。予は斯く觀じ來つて、一種崇嚴の感動を惹起したり。此感動を覺えてより、不知不識の間に新なる生活の興味を得たり。げにも靈肉一如、物心一如の人生觀、世界觀は、人の心胸を開拓して、萬古の花を綻ばしむ、久遠の生活に悟入し得るは、亦此觀想の果實のみ。靈と肉と、心と物と、本來一如なるが故に、「我」はアルハ也オメガ也、三世を通貫して神と共に樂しみ神と偕に働く、眞

實の人、不壞の身たるを達觀し得る也。』

あはれ予が此文を草して後ち、茲に三年間、予は此觀想の果實なる者を果して幾何か樂しみ得たる。達觀するは小智の凡骨も或は之を難しとせし、體達するに至つては俊傑の士と雖易しとせず。況んや劣根予の如き者に於てをや。予は心の奥底に多少の不安を懷きつゝ、兎も角も進んで靈肉一如の要求に根ざせる新しき理想に憧れたり。

四、樂園の幻夢

既に一年前とはなりぬ。予は靈肉一如の思想に基き、向上の模表を求めて、之を發露し得たるを感じ、呼ぶに「全人」を以てせり。その意蓋し全人的要求を具體せる理想の人格を指すに在りたり。全人的に生活せよ全人的に思惟せよとは、予が熱心を傾倒したる當時の叫びなりき。

當時予は思へらく、自己の分裂は實に痛しき事實なるも、同時に祝すべき状態と見るべし、自己の改造進歩は畢竟此の内部生活に於ける争闘の果實なれば也。而かも不斷の争闘は到底人性の堪ふる所にあらざるが故に、自己は統一を得て始めて安心の域に入る。さらば自己統率の根本原理は何ぞ——然り、當時予は觀想に専らなりしが故に、根本の原理を尋ねること、統一の實驗に觸るゝことゝを殆んど同一視せるが如し。されど單なる理性上の解釋と、全人格に於ける實驗とは日を同じうして語る可きにあらず、求道の誠意ある青年諸君は、深く此差別を想ふ可き也。兎も角も予は原理を尋ねて原理に達へり、即ち自己統一の原理は、自己分裂の動機の中に見出す可き者なりと觀じ、最初に發表せる全人論の中に、次の如く之を説きたり。曰く、

『分裂せる自己を見よ、靈と肉との抗爭は、人心の永久的實驗と稱せら

る。而かも偏に靈を重んじて肉を卑しむ精神主義乃至克己主義は、肉の享樂を是認してそこに人生の意義を感ずる感覺主義乃至快樂主義と全然矛盾する者なるか。健全にして豊富なる生活の理想は、寧ろ兩者の融洽調和に存し、若くは平行一致に存せざるか。腦髓のみが獨り神の宮居たるに非ずして、肉感其者も亦實に神聖にして美しき者に非るか。總て人間に屬ける者は神に屬ける者ぞ、一様の價値ある者にはあらざるか。否、人間に屬ける者は即ち神に屬ける者、神に屬ける者は即ち人間に屬ける者、Humanity & Divinityとは本來合一す可き者に非るか。更に推し詰めて言はば、肉を外にして靈は無く、ヒューマニチーの中にこそデビニチーも存するに非るか。靈と肉とは別々に考へらる可きに非ずして、人は靈肉の此身この儘、神の子の光榮を有する者なり。』

予は斯く考へ來つて、如是の人生こそ、眞に全的要求を完成したる現世の天國なれと思ひぬ。予は此思想を敷衍して、『樂園現前の消息』と題する論文を雑誌「新人」に掲げたる事あり。今より之を回顧すれば、春曉の一夢に似たれども、左に録して砂上の足跡を趁はむ。(文體は素口口語體なりしも、茲には原意を其儘に存して纔かに語尾の變化を改む)

第一義欲と題せる冒頭の一節に曰く、

『全人的に思惟せよ、全人的に生活せよとは、吾等が衷心の叫び也。さ
らば全人的とは果して何事を意味する乎。全人は先づ「自己」の究竟
満足を生活の根本要求と見る。家庭、國家、人類に對する職分の觀念
は、素より嚴肅にして沈痛深奥にして莊美也。而かも眞面目に、徹底
的に、自己生存の問題を思量し來れば、外部一切の何物に對してより
も、先づ現實の自己自身に對して、盡す可き職分の存在を知る。われ

自身に對する職分の感は、我以外に對する總ての夫れの原始にして
且つ根柢也。今の世の人にして眼を此原始に開かず、足を此根柢に
立てずんば、あらゆる職分の充實も、畢竟弱く力なく命なき奴隸道徳
に墮するならん。わが所謂全人は、自己自身に對する職分の感鋭く
その職分の充足を以て、根本の悦樂、生存の第一義と觀する君主道徳
の奉行者也。自己自身に對する職分の充足とは何ぞや、換言すれば
「自己」の窮竟満足、即ち自己の本性を如實に開發し、自己の欲求を徹底
的に充實するの謂ひ也。假令窮竟満足を即時に現前に享樂し得ず
とするも、此心境を望んで欣求し、精進し、努力するの生活、即ち是れ全
人の境涯也。窮竟満足を欣求せず、之に向つて精進せず、あるがまゝ
の自己を固執して、只刹那的に非徹底的にのみ生存を享樂する者は
自己に對する最高職分の忘却者也。窮竟満足境はやがて是れ一種

の解脱し救済せられたるの境涯と言つて可。此境涯を愛慕すること鹿の深水を戀ふるが如きを名けて第一義欲と言はん乎、全人は畢竟第一義欲の人、誠實なる熱情を以て、第一義欲の満足を欣求するの人也。古往今來第一義欲の行者其人に乏しとせず、而かも全人は第一自己に對する職分を自覺する點に於て、第二自己の窮竟満足を性情生欲の開發實現に見出す點に於て、普通の用語例に於ける解脱の人、若くは救はれたる人と、向上の一路を等しうせざる者なり。即ち第一義生活の見かたと、第一義生活に入る行きかたとに於て、全人は古聖先哲と多少面目精神を異にする者也。」

予は今猶ほ昨の如く、第一義欲の道者也。而かも古聖先哲と面目精神を異にすと敢へて揚言して憚らざりし一年以前を顧みて、竊かに冷汗の腋下に湧くを覺えずんばあらず。あはれ盲者の光に逢ふこと何

ぞ斯くばかり過かりしぞ。予は過去五六年間の生温かりし思索に比すれば、實に血涙滂沱とも謂ふべき最近一年間の苦心を通して、始めて第一義生活の見かた行きかたに關する前論の不徹底を悟了し得たり。自己に對する職分の満足も善し、性情の開發も、欲求の充實も亦敢へて善からずとせず。されど「自己」とは本來何物ぞや。あゝ予が靈肉一如の觀想は、久しく予をして折衷妥協に陥らしめ、容易に第一義生活の奥底に徹する能はざらしめたるなりき。「如是人生」と題せる前掲論文の第二節に曰く、

「全人は在るがまゝの自己を如實に洞觀して、そこにあらまほしくあり得べく、あらねばならぬ生活の理想を了悟し開顯す。既にあるがまゝの自己を知らんとす、僞善と虚飾とは全人の惡み卑しむところ便宜の爲に自らを欺き、不徹底の前に自らを味ますは、全人の到底堪

へ得べからざる苦痛なり。全人は此種心中の賊を照破するの聰明と勇氣とを有せざる可からず。偽らず飾らず曲げず味まさらむとする現實の自己は、省みて偽り飾り曲げ味ましつゝあるの慘たる自己を發見す、自己を如實に觀するは、人生の一悲劇也。而かも全人は常勝將軍にして、彼はあるが儘の自己を眺めて、無限の價値をこゝに發見す。彼は現實の中に理想を認めて、そこに不朽の人を見る。われは人也てふ自覺の前には、王者の冠も光なく、惡魔も襟を正さむとす、全人は此自覺に立ちて、靜かに如實の自己を觀じ、一切の煩惱と罪惡と弱點とを具有する肉身の人その者の中に、本然の美性善徳を了悟し、之を開顯するを以て、生の最高悅樂と見る。必ずしも煩惱を解脱すと言はず、必ずしも罪惡を遠離すと言はず、必ずしも弱點を棄捨すと言はず、只偏へにあらまほしく、あり得べく、あらねばならぬ善

徳美性を了悟開顯するによりて、煩惱も罪惡も弱點も、自ら淨化せられ、靈化せられ、純化せられずんば止まざるなり。解脱と遠離と棄捨とは、素より心賊退治のヒロイックなる道行の一面なるも、全人の行きかたは、専ら欺かず偽らざる人間自然の性情欲求の中に、善美の理想を了悟し開顯せんとす。人間自然の性情欲求は遠離し棄捨す可き者にあらずして、調御し統制す可きもの、發展し完成す可き者と觀る。斯くして全人は先づ第一義生活を人生あるがまゝの性情と欲求との中に發見す。彼は一切の自己を否定せんとせずして、寧ろ一切の自己を肯定し、現にあるがまゝの自己の中より、あらまほしき自己を開顯し、之をあり得可からしめんとして、努力精進し、之をあらねばならぬ者として歸依奉持す。即ち彼は人間本位的なると同時に個性中心的、自己洞觀的なると同時に理想實現的。之を一語に約す

れば、あるが儘なる自己内容の全局を開顯して、そこにあらまほしき人生美の華實を悦樂せんとする、之を是れ全人生活の面目と爲す。其實にも美しき樂園の夢なりし哉、若し予にして在るが儘なる自己内容の中より、人生美の華實を開發し得たらむには、眞に至福と謂ふべかりしならむ。されど茲に所謂全人の生活は、予に於て單なる理想の幻影なりき、觀念の抽象なりき。煩惱の肉身この儘にして、本然の美德を開顯せむと、斯くは揚言したるもの、如何せむ予は猶ほ煩惱の故を以て惨たる苦痛を嘗むるに非ずや、人間自然の欲求は遠難す可きに非ずして、統制し發展す可き者といへど、誰か實際に鑒みて、言ふの易く行ふの難きを歎かざらむ。予は今にして全人的思惟法の終に人生を惡の苦痛より救ひ得ざるを悟了せり。予は全人を以て、愛と肉、主觀と客觀、自愛と他愛、主我と無我、理想と現實、苦痛と快樂、其他一切の人生經驗に

於ける矛盾分子を歸一する者とし、名けて中道の行者と言ひき。而かも今よりして之を思へば、當時の予は眞に統合攝取の超越道に立てるにはあらず、自ら辯解したるに拘らず、予は猶ほ折衷主義者の亞流を脱却し得ざりし也。眞に心的經驗の兩端を統制せんが爲めに、予は一層根本的徹底的なる超越道を發見するの必要ありし也。今や予は之を自覺し得たりと感ず。されど全人の理想は、久しく予をして超越道に向つて飛躍する事能はざらしめぬ。

遮莫予は一たび全人の理想に觸れてより、感興湧いて泉の迷る如く、一種の詩を賦して、朝夕獨り口誦し、竊かに新しき生活の之より開くるを期したりき。果して是れ新しき生活の曙紅なりしか、若くは古き生活の殘照なりしが、予は未だ自ら之を知らず。只こゝに記して精進の名殘を偲ばん、所謂全人の讚頌に曰ふ。

『全的自己の要求に立ち

現實に即し現實を超えて

生の味ひに徹せんとす

第一義欲是れ也。

心遠悉く開發して

一切の興味を攝取し

最善の價値を創造す

自己充實也個性顯現也。

われ茲に存在の意義を感じ

ヒューマニチーの美を勞翫しつゝ

健闘し悦樂し而して報謝す
之を是れ全人の境涯と云ふ。

全人は靈肉を一如と觀じ

常に苦樂の中道を辿りて

最高の生活を倘悦す

一心自由也即身解脫也。

向上の一路窮りて

わが生の全宇宙に繋り

久遠劫に貫くを悟る

神與限りなく法悅言ふべからず。

本地の風光を尋ねれば
畢竟生の一味に存す
不朽の神人ごゝに在り
不壞の法身ごゝに在り。

斯くて我れ智慧の眼を開き

愛を勇猛心を發し

聖賢と本願を同じうして

共に現世の樂園を拓く

噫是れ最高靈覺の生活なり。』

噫斯の如きは眞に是れ最高靈覺の生活なる乎。予は此一偈の後に記

して、一念開發す諸聖來證せよといひき。果せる哉東西古今の諸の聖賢漸く予が胸中に光來して、『爾いまだ生の一味に徹せず、爾いまだ不朽の神人を知らず、爾いまだ最高靈覺に入らず』と、紫電一閃、予が夢を驚かすの時は到りぬ。

五、自覺の悲哀

予は今日に並りて全人の理想を弊履の如く捨てんとす。活者にあらず。されど全人の理想を描ける予は、當時猶ほ極めを不徹底なる不透明なる根柢に立てりし者なり。予は正しく全人を描いて點睛を忘れたりじなり。されば予が今自ら大に全人を離するは、全人を棄つるにあらざるを活かさんと欲すれば也。否、一たび死して復た活くは非ずんば、久遠の生に入る能はず、予は既に全人を殺せる者なり。げにも全人

は生存の肯定者なりき、全人は人性の謳歌者なりき。而して予は實に全人の理想より急轉直下、生存を否定し、人性を呪咀するの、沈痛なる實驗を味へる者なり。予は予が復活を語る前に、如何にして肯定より否定へ、謳歌より呪咀へと轉入せしかを、明さまに告白せざる可からず。予は始め全人の態度を説いて、彼岸を有無の過境に見ず、眼頭實有の世界に眺むと言へり。げにも是れ第一の謬見なりき、否、此世界の半面を見て他の半面を忘却したる近視眼的見解なりき。予は又全人は天性の流露の中に、人格美の開發を樂しむと言へり。是將た第二の謬見なりき、否、此人性の半面を見て他の半面を閑却したる偽善者的放言とも謂ふ可かりき。當時の予は自ら近視眼とは知らず、況んや自ら欺くの偽善者なりとは思はざりしも、醒めて率直に自らを反省すれば、斯く呼ばれても止むを得ざる無智の罪惡に陥りしなりき。あはれ予は、デル

ファイの城門に書かれし「汝自身を知れ」の一語を、色讀すること餘りに遅かりし哉。殊に予は予が心中の欲望其者に就て、自ら知る所極めて淺薄なりき。「樂園現前の消息」てふ一文の中に、嘗つて予は論じて曰く、「全人は生の悅樂を重んじ、之を最高度、最強度、最深處に於て充實せんとする故に、こゝに妙智慧眼を開いて意志の活動を導く。慧眼一たび開けば、例令諸の欲求起りて、奔馬の鬣を列ぬるが如く、意志の尖頭に狂ふとも、全人は巧に之を調御し得て、些の困惑をも感ぜざる也。人或は言はん、既に生欲を肯定す、必ず諸の欲求に對して取捨に迷ふの時もあらん、況んや諸の欲求その者をすら之を肯定すことせば、恐らく取捨も不可能ならん。是れ素より誤解迷想のみ。全人の性情は教養によりて如實に開顯し、全體的なるが故に自ら部分の價值を辨じ、均勢的なるが故に能く中心を失はず、且つ全人の欲求は中道の

思惟法に則りて訓練せられ、統一的なるが故に盲動せず、常規的なるが故に奔逸せず、智慧の光明に照されて、徹底的の満足を樂しむ也。諸欲の矛盾衝突は、人生の日常經驗なるも、全人は第一義欲てふ統率者を有するが故に、その慘劇を超越し得るなり。」

現在の予は如上の章句を讀み返して、心竊かに自ら愧づ。如何なれば予は斯の如き遊戯文字を羅列して、獨り満足したりし乎。假令予自ら如是の全人なりと誇負せざりし迄も、人生の事、談豈に斯くも容易ならんや。「慧眼一たび開けば」てふ其根本の自得こそは、眞に人生の大事に非ずや。此自得を確かに捕捉し來りて、始めて諸欲の肯定を説くべし予が理想の全人は此自得の人たる可かりき。而かも現實の予自身は飢えたる虎狼の如き欲情の苦難を免れ得ざるに非ずや、復た何處にか徹底的の満足あるべき。予の理性は假りに慧眼を開きたりとするも

予の人格は猶ほ依然として盲目の放浪兒なりき。

一切の生欲を肯定せんとしたる予は、一切の生欲の爲めに惱まされたり。斯の如き經驗は、予一個人に限られたる特殊の苦痛にはあらざる可し、古聖先哲は、之が爲めに極めて深酷なる經驗の歴史を遺したれば也。されば予は今只抽象的に少しく予の嘗めたる苦痛を語らむ。予は先づ第一に欲望の無限無際なるに困しみたり。特に予は元來趣味の狭からぬを寧ろ憂ひとする程なりし故に、千種萬様の欲望殆んど同時に奔騰し來りて、互に衝突し扞格するが爲めに、予はその取捨選擇に苦しみ、はては欲望の適當價値を評量するの暇もなくして、眼前の快樂と便宜との爲めに、屢々悔恨を残すの痴態をさへ繰り返しぬ。試みに思へ、音樂を解せざるは耳の教養なければ也、吾等は絶えずコンサルトの高雅なる感じを味はざる可からず、新興の演劇は考へしむる藝術に

して同時に美の綜合なり、一夜を費すも行いて而して見ざる可からず
それがしの美酒を味はずんば近世の詩を解する能はず、なにがしの夜
會に出でずんば時代の人を知る能はずと也。且つ吾等は種々の興味
を攝取すること斯の如きに止らず、進んで種々の活動の爲めに精力を
傾注せざる可からず、名譽も之を得よ、權勢も之を得よ、金錢も之を得よ
而して學殖徳望も亦之を得可しと也。げにも斯の如きの目的物は、所
謂文明人の好んで追求する所にあらずや、而かも其欲求の一つくが
相當の價值を有すとせば、誰か能く終に之を拒まん。然らば予一個人
に於ては即ち如何われは是れ第一義境の憧憬者にあらずや、柳緑花紅
種々雑多なる欲望の誘ふがまゝに轉々し行かば、個々の欲望は之を充
實し得むも、果して何處にか徹底的根本的の満足ある可き。予は諸欲
の價值を許せり、されど未だ最高の價值を知らず、又最高の價值の前に

低級の價值を犠牲とするを知らず、總てを活さんと欲しつゝ、而かも終
に猶ほ満足し得ざる胸中無限の空虚あり、無際食欲あるを見ては、且
つ驚き且つ怖れぬ。予は欲望の壓迫に對して、自己の無能力なるに呆
れたり。茲に至りて又始めて、全人は巧に之を調御し得て、些の困惑を
も感せざるなりと放言したりし前非を悟りぬ。
欲望の子を苦しめたるは、單にその多岐なるが故のみならず、第二には
その強烈なる性質を以て亦予を困惑せしめたる也。予は曩きに「生の
悅樂を重んじ、之を最高度、最強度、最深處に於て充實せん」と言へり。而
かも最高度、最深處とは何ぞや。諸欲の中の最高の價值、最深の意義を
有する者を充實するに依りて生を悅樂すと謂ふか。予は未だ最高の
價值あり、最深の意義ある欲望の何たるを知らず、只諸欲の皆共に孰れ
を何れと判じ難き強度を以て躍現し來るを知るのみ。欲望の強烈な

る者に至りては、生命を養ひ強めて、其内容を豊富にするよりも、却つて生命の力を弱め、之を衰滅に歸せしむる無からず。蓋し耽溺の酔ひ心地は、欲望に伴ふ一の魔薬にして、金石を蕩かすの力あり。此故に水に渴する者は水の爲めに病み、食に飢えたる者は食の爲めに苦しむ、金を求めては金に溺れ、名を求めては名に溺るゝ、孰れ人界の常態にあらずや。予は悚然として恐れ戦けり。予は欲望を是認して、而して欲望の烈火の爲めに總身を焼くに至らずやと思ひぬ。されど欲望充足の快楽は、暫らく予をして來らむとする苦難の豫想を忘れしめたり。然かも第三に予が欲望の爲めに苦しめるは、之が充足と共に生ずる一種言ふ可からざる悲哀と不満とに在りき。素より總ての欲望が不満と悲哀とを誘起するにあらず、されど如何なる快樂にても之を味ふ久しき能はず、快き樂音を耳にして恍惚境に遊ぶ刹那すら、一念現實の我に歸

れば、その樂音の香として夢の世界に消え入るを歎く。況んや肉に屬ける多くの欲望は之を獲て更に加ふるあらんとするの騒しき心地にあらざれば、即ち之を充てて後ち何としもなく果敢なげなる一種の哀感を催すか、若くは更により深く大なる快樂に徹せんとする不平不満を覺ゆるか、二者其一つを離れずして、眞に「生存の價値」を感ずる快樂とでは多しとせず。時として如何にも生甲斐ありと感ずる如き場合にありても、その感覺は全く一時にして、永續的の快樂を肉の欲望より得るは難く、且つ如何に強烈の欲望も之を満足し終るに至れば、胸底に大なる空罅の生じたるが如く、寂寥の感に堪へざるを常とす。斯の如きは予が縷説を待たずして、自省の心ある總ての人の恐らくは日々經驗する所ならむ。只欲望の性質の斯の如くなるを洞察し得ると否と、洞察し得て猶ほ之を超越せむとする否と、人々の態度は自ら異なるあら

むも、欲望本来の性質を根柢より洞察し得たりとせば、恐らく如何なる執拗漢も、是以上の或物を欣求するの情に堪へざる可し。

予は先づ欲望を調御せんとして失敗し、更に又其強力に抵抗せんとして失敗し、はてはその興ふる快樂を味うて心の満足を得んとして失敗し、あはれ全人たらむとするの誇りは、倏忽にして土崩瓦解し終れり。眞に自己を知りし今、嘗めたる杯は極めて苦かりき、全人の美しき夢より醒めて、予は自覺の悲しみに撲たれぬ。而して深くも疑ひ思へらく生の味ひに徹底せむに、さらば欲望を如何かせん。噫、是れ予が苦心の根本問題なりき。

六、欲望問題

われに意欲あり、故にわれ生く、欲は即ち人也。予は欲望の爲めに深き

悩みを感じつゝも、猶ほ未だ之を脱離せんとするの、不合理にして且つ不可能なるを信じたり。さらば予は心に痛く苦しみ歎きつゝ、強ひても慾の重荷を負うて一生趨らざる可からざるか。

予は茲に至りて思へらく、意欲ありて人生あり、而かも人生の平安が求めて與へらる可しとせば、予は須らく欲望の種類を詳かにし、取捨の標準を明かにせざる可からず、さらば幸に欲望を制御し得て自ら苦しまざるを得んと。予が「最深最奥の要求」に就て、嘗て一文を草したりしは不知不識、此種の動機に出でたりしならむ。此論文に於て、予は科學者の爲すが如き分類法を取らざりき、只予は予が心理を自省して、疑問の中心に觸れむとしたり。今少しく内容を補ひ文體を改めて左に其大要を掲ぐ。

「一。吾等が第一の要求は、自己の生存其者也。何物の生存よりも先づ自己の生存を贏ち得んとする、そこに人類の根本欲あり。生を愛するは人類の本能なり、此の本能を擁護する處に始めて原始の権利生れ、此の本能を自覺して之に忠實ならむとする處に、始めて本務の初發を見る。如何なる權威か吾等各個人の生存欲を否定し、若くは脅迫し得べき者ぞ。吾等各個人自らすらも自己の生存を否定し若くは脅迫するの權威を有する者にあらず。『自己生存の絶対肯定』、そこより『人てふ者の犯す可からざる威嚴の光耀』し來るを見る。彼は王者なるが故に威嚴ありとは謂ふ勿れ、彼は賢者なるが故に威嚴ありとは謂ふ勿れ、彼は乞食なり頑童なり白痴なりとも、生存の權利を有するが故に、人たるの威嚴を失はざる也。吾等は生れながらにして無才無能なりとも、猶ほ生存其者の價值を少くとも吾等自己に對

して有せずんばあらず。自己の生存を重んずるが故に之を敬ぶの情感を生ず、生存欲はやがて是れ自敬威の根柢にして、同時に一切活動の原力なり、生存欲を絶したる時、何處にか復た人生なる者あらん。さらば生存欲こそは、吾等が最深最奥の要求なるか、曰く否。吾等は現に生きて而して働けり、時としてパンに窮し水に渴する事あるも野の獸、空の鳥すらも、猶ほ其生を樂しむに非ずや。明日爐に投げ入れらるゝ草木すらも、花咲き實を結ぶに非ずや、況んや吾等は人類なり、何を食ひ何を着んと思ひ煩らふ以上に、吾等は深き要求を有す、吾等は單に生きむとして懊惱煩悶する者にあらず、吾等はわが生を愛するが故に、生を豊富にし、生を擴大し、生を充實せんと欲す、こゝに吾等のより深くより大なる要求ある也。

二。斯くて第二の要求、吾等の前に現はる、外物を攝取し來りて自己

の生存を充實せむとするの欲望是れ也。樹木の生活を見よ、その根は土中に廣がりて、あらゆる養分を吸ひ取らんとし、その葉は空天を仰ぎ開きて、光と水と酸素との總てを受け入れんと準備し居る也。根の一脈搏葉の一呼吸、そこに樹木の生命繋れり。根の廣がれば廣がる程、葉の繁げれば繁げる程、樹木の生は豊富となり擴大となり益々充實し行くなり。人生亦斯の如き者なり、自己てふ者の生命力は本來内在すと雖、その營養と生長の資料は宇宙と人生の供給に俟つ供給に俟つと言はんよりは進んで之より攝取し來る。吾等に食物の欲求あり、魚介、鳥獸、果實乃至一切の美味悉く生を養ふに足る。吾等に智識の欲求あり、人類社會の精神的財産たる學問一切の不盡なる寶庫は、吾等の進んで開くを待てり。吾等に美を愛するの欲求あり、一切の藝術と自然とは、無限の興味を眼頭に薫す。吾等にして本

然の性能を如實に開發し、一切の興味を攝取すとせば、その悅樂や實に廣大無邊と謂ふべし。人類の欣求する妙樂境の半面は、確かに此種の充實生活に在り。且つ之を現實に徴すれば、必らずしも一切の興味を攝取すと謂はず、幾多興味の中の或る一種類を享樂するのみにて、吾等は満足し得る者なり。例へば智識欲の發現に見る、世には書齋を樂園と觀じ、一生書物を食ふ蟲と呼ばれて猶ほ晏如たる人もあるに非ずや。更に低級なる飲食欲に見る、世には一瓢の飲の中に陶然醉を樂しむの外に復た憂なきの人もあるに非ずや。況して人性の全局を開いて、こゝに知情意一切の興味を賞玩し得たりとせば、是れ豈に人生の至樂境に非ずや。

然らば攝取欲こそは、吾等が最深最奥の要求なるか、曰く、否。吾等は生を充實せんと欲して、諸の興味を攝取し盡すとも、果して能く徹底

的窮竟的の満足を感じ得べきか。吾等は「興味」の攝取よりも更に根柢深き要求を有す、自己其者の實現是れ也、全人讃頌の俣に稱して所謂「價值の創造」といふ者は是れ也。前者と後者とは相俟ちて成長發展す。若し然る能はずんば吾等は終に満足し得ざる者なり。

三。吾等が第三の要求之を名けて創造欲と謂はん乎。凡そ宇宙間に存在する者は、眞に恒河の砂よりも多くの種屬に分たれながら、一として相等しきは無し、萬物悉く個性あり、特に生物に至りては、その個體の一つづつが、殆んど測り知る可からざる潜在の力と性質とを藏して、これを日光の下に開展し行く也。個體は即ち創造なり又創造の力なり。人類に在りて此の眞理は益々顯著なるを見る。古往今來、幾百千億の人、顔の相等しき者無きが如く、性格も亦相異り、體力、趣味、才能、氣質に至つては、全世界を通じて各個人皆「われ一人」也。素

より類型の等似はあり、而して模倣は人の天性也、故に人々相同じかる可くして同じからざる所以の者は、われ一人の個性を有すれば也。況んや人は絶えず何物をか作爲し創造せんとするの本能的衝動によりて、その個性を働かしむるが故に、所謂柳は緑花は紅に門を敲けば戸々人の應ふるあり。大工は木を削りて器を製し、農夫は種子を蒔いて穀物を作り、畫家の畫を描き、詩人の詩を詠する、孰れ皆一種の創造にして、作爲其者は、人間性質の何物かを満足せしむる價值ある也。天才に非るよりは、畫家の畫、詩人の詩、其多くは獨特の光彩なしと評せらるゝも、價值の高下は別として、天地の間に一物を加へたりてふ事實より、如何なる凡作も猶ほ一種の創造たるを失はざるなり。此の意味に於ては、巢を造る鳥も、穴を掘る蛇も、機を織る女も、花を植ふる男も、勞働者なり、作爲者なり、創造者なり。その生み出せる結果

の價值の大なれば大なるに従つて、その個體の價值は定めらる可し。生物學者は、生の根本欲を營養、生殖、運動の三種に分つ。之を吾等の分類に充當すれば、營養と生殖とは攝取欲の顯現と見るべく、運動は創造欲の原始とも見るべし。而して吾等人類に至りては、動植物よりも一層複雑なる程度に於て、相應の成長期に達すれば、攝取欲の充實のみにては満足する能はず、進んで創造欲の活動を事とす。個人の眞價値は、その作爲行動に於て始めて顯現すと謂ふも可也。何等か作爲創造する處無くんば、價人の價値は永しへに埋沒せらる可きなり。吾等は創造を光榮とし、創造の中に「自己」は活く。

然らば創造欲こそは吾等が最深最奥の要求なるか、曰く否。吾等は攝取の作用によりて、物を我の中に再生せしめ、創造の作用によりて我を物の中に新生せしむ。總ての中心は我に在り。敢て問ふその

所謂我とは何ぞ、我といひ自我といひ自己といふ、暫く同一義に解せしめよ、こゝには便宜の爲め、自己と呼ばん。自己とは本來何物ぞ。肉體是れ自己なるか、あらず。五感是れ自己なるか、あらず。意識是れ自己なるか、あらず。然らば肉體と其の官能と其の意識と無くして猶ほ自己なる者ありや、曰く、あらず。我は考ふ、故に我在り。自己は意識、官能、肉體の中の何れにもあらず、又その總てにもあらず。感覺しつゝあり意識しつゝある最高統覺其者こそ、自己の本體とも眞髓とも謂ふ可きなれ。最高統覺之を名付けて靈といひ、精神といひ、又單に心といふ。攝取欲も創造欲も、就れ心の作用なり、然り其向外的作用也。此の作用の原動力は何ぞ、渴しては飲み、感じては驅ひ、思考すれば發言し、計劃しては實行せんとする自由の要求即ち是れのみ。吾等が心の根柢に自由ならんとするの要求あり、その外界に發

露する者、即ち攝取欲たり、創造欲たり。此の二つは各々異なるが如きも、全く自由欲の向外的發現に過ぎず。彼のニイチエが所謂權力の欲 (Will zu Macht) の如きも、實は自由欲の向外的發現たるなり。吾等は之を得て能く満足する乎、決して然らず、然る能はず。何となれば心の自由ならんとする要求は、外に向つて働くよりも、更に強烈なる力を以て、内に向つて働けば也。

四。こゝに至りて心その者が夫れ自ら内的に自由ならんとする解脱の要求こそ、吾等が最深最奥の大欲なりとせざる可からず。政治上の自由よりも、經濟上の自由よりも、先づ精神上の自由を得んは吾等が衷心の祈願ならずや。自己の内的自由を得ずんば、假令人文一切の興味を攝取し盡し、又わが才能の創造し得べき最善の事業を爲し得たりとも、自己は猶ほ是れ憐れむべき繁縛の人たるを脱し得可

からず。之に反して身は貧賤に居し病弱に處するとも、一心浩々、鳥の大空に舞ふが如くんば、殆んど是れ自主自由の帝王生活なり。富貴權勢は浮雲の如からんも、内的自由の享樂は、永しへに人を活かしむるを見よ。内的自由の要求とは、即ち解脱欲是れ。古今東西の宗教的人物は、皆此種の大欲の燃ゆるが如き人々なりき。彼等は如何にしてか此の大欲を満足せしめ得たる、歴史的宗教の萬世不壞なる價値は實にこゝに光耀するなり。吾等が最深最奥の要求は、畢竟古聖の證悟たる此の内的自由に在り。

五。心靈上に於ける内的自由は、眞に吾等が最深最奥の要求なり。而かも吾等にして「諦め」を知り、足るを知るの性情あらしめば、内的自由の妙境に入る、必らずしも不可能の事にあらず。念佛を唱へ題目を論ずる、その信心只一つにても、内的自由を獲るの好縁たらん。さ

れども吾等は更に想ふ、一念の信順によりて、若くは或種の達觀諦悟によりて、内的自由を感得したりとせよ、而かも此恩寵の世界に於て吾等は果して長く安住し得べきか。主觀的自由の感得に止らず、更に客觀的自由を獲んとするの抑へ難き要求を吾等は有せざるか。即ち自由ならんとして自由となりつゝある自己は、内的満足に止らずして、一切の外圍を自己に順應せしめ、内的自己の要求を現實社會に實行せんとするの大欲を有せざるか。是れ精神的内觀的自由に對して言へば、實際的靈肉一如的自由の境涯なり。即ち自由の要求を推しつゝれば、自己を客觀化し事實化し具體的生命化せむとするの大欲を含むを見るべし。こゝに至りて始めて全的自由あり、吾等が窮竟の要求は、現實生活に於ける全的自由の享樂には非るか。現實生活に於ける全的自由の享樂！噫、誰か此の境涯を懷うて、無限

の歡喜を覺えざらん。而かも翻つて靜に想へば、吾等は向上の一路を辿りて、餘りに高く登り過ぎたり。如是の帝王的自由なる者は、げにも窮竟要求ならん。されど是れ果して現在あるがまゝなる吾等の能く享樂し得る境涯なる乎。一切の虛榮を斥けよ、而して現實の自己を見よ、あはれ帝王的自由の欣求者は、奴隸の如き状態にあらずや。爾は食欲の奴隸にあらずや、爾は色欲の奴隸にあらずや、爾は金錢の奴隸にあらずや、爾は虚名の奴隸にあらずや、爾は書籍の奴隸にあらずや、爾は運命の奴隸にあらずや、あゝ爾を縛れる鐵の鎖は、何ぞ斯くも多くして且つ重きや。されど根本の憂を見るに、爾は心の自由てふ大欲の存するを忘却して、個々の小欲に没頭し、生の悅樂なる者を、刹那の刺戟に求めたり。げにも爾を縛れる鐵の鎖は、爾の欲望その者なりき。——吾等は自ら省みて、斯くの如くに嗟嘆せざるを

得ず。即ち知る全的自由といふも、その根本は一心の自由に在り。
吾等にして内的自由を得んか、その歎びや窮り無からん。内的自由
を得て始めて、吾等は自己に満足し、徹底的に己が生を悦樂し得ん。

予は斯の如く觀じ來りて、切に内的自由を得るの道を發見せんとした
り、且つこゝに至りて思へらく、一切の欲望皆それの意義と價值と
を有せむも、心の自由には若くべからず。個々の欲望を是認して、之を
玩味し調攝せんとすればこそ、われに無限の苦痛もあれ。若し一切の
欲望を脱離するの可能にして且つ當然なる可くんば、われは奮つてそ
の道に就かん。解脱の要求を外にして、予は今何物も欲しからず。あ
はれこの心の繫縛より我を解き放つは誰ぞ。予は今牢獄の中に在り
て、青空の自由を戀ふる也。

七、釋尊の踏みし道

解脱を願ふの志は、端なくも釋迦牟尼佛の生涯を、予が眼頭に髣髴せし
めたり。予は嘗つて屢々釋迦傳を讀み、又大小二乗の教理に就て、多少
聽く所無きにあらざりしも、二千五百年前の印度に生れて、乞食の如く
に托鉢したりし寂靜涅槃の證悟者と、生の悅樂を歎べる予とは、因縁餘
りに薄かりき。予は從來一たびも、彼と我と同じ世界の空氣を吸ひ、同
じ人類の血を分ちたる兄弟の心地を覺えざりき。思ひきや此世此時
にして、端なくも活ける釋尊を新に發見せんとは。

あはれ一國の儲君として、伽比羅城中に生ひ立ちし賢く健かなる年少
の太子は、何故に宮殿の榮華を捨て、山林の行者とはなりたり乎。
彼は當時の學問藝能に於て全き教養を受けたりしならん、彼は五欲の

快樂に於て、殆んど満たさざる者無かりしならん。彼は婆羅門の感化に依りて厭世の心を養ひたりとするも、同時に妻子の愛に依りて人生の快樂を味ひしなり。即ち彼も亦一時は、靈と肉との二主に仕ふる全人たるを喜びしならん。而かも彼れ終には五欲の生活を見ること、恰かも癩病者がその病苦を厭忌するが如く、終に一切の恩愛を絶ちて家を棄て去りぬ。既に久しく厭世の人なりし太子は、出家によりて煩悶を斷じ、一心求道の人とはなりぬ。思ふに彼が二十九年の生涯は、五欲充實の生活なりき、而かも五欲に慊らざる一點の靈火を抱きし彼は、却つて之が爲めに惱みたり。彼が煩悶の根本は全く欲望問題なりき。彼は既に一たび欲望の甘さを知りぬ、之を棄捨せんと決意する前には、幾度か逡巡したりしならん。さばれ彼は肉の欲望に執着しては、到底安心の得可からざるを思ひ、奮つて之を棄捨したり。げにも白馬健歩

の一超飛躍は、彼が解脱の第一歩なりき。彼は出家の一刹那に於て、三十年の生涯を全く埋葬し終れる也。彼は肯定の道棄て、之より否定の道に入れり。此時彼は死したる也、而して命數無窮なる釋尊はここに生れ出でぬ。噫、彼は果して二千五六百年前の一太子たり、一沙門たり、一覺者たるに止る可き乎。彼が沈痛なる五欲の歎き、熱烈なる聖求の志は、現代の予の胸底にすら、強き鋭き共鳴を起さずしては止まざるに非ずや。吾等現代に生くる者の、悩むは同じ欲望問題也。あはれ少くとも予一個人は、之が爲めに苦しみ之が爲めに悶え、三十年の生涯を人知れぬ不安に送たり。予は幼よりして既に幾度か四門の遊觀に類する人生問題に觸れたりしが、最近一年湘南閑居の間、海光嶽影に親しみつゝ、靜かに過ぎ來し跡を思へば、悵然として大息せざるを得ず。而かも世塵を絶したる空と海と砂原と松林と、孰れ新しき天地の呼吸

を今更の如くに感じては、遠離の志、日に増して切なる者ある也。わが『根本佛教』の著者は、微妙くも箇中の消息を傳へて、求道者の心理を披瀝し得たり。彼は悉多太子と聖フランシスコを比較して曰く、

『宮中に於ける榮華多幸の中にも、既に五欲以上の理想に憧がれし人が、城内喧擾の市街を出で、城郭の外天然の曠野に出で、明に心機の變化を覺えし事、何れの世何れの人にも起るべき經驗なるべし。聖フランシスコがその二十三歳の春、數ヶ月の病漸く癒えて、アッシシ都城の東門を出でし時の感も亦佛陀に似たりしならん。城門を出でて一步、市井の繁華は夢の如くに消え、而して大空の深蒼に日光遍く充ち、仰げば峨峨たるスバシオの峰、その中に聳へ、望めばオンプリアの平野遠く霞み亘れり。この間に立ちて病餘のフランシスコは、つくづく放縱なりし過去の貴公子生活を追懐し、厭忌し、始めて心動きそ

め、終に出家修行の決心を生むに至れり。是れ現に七百年前の史實にして、又汎く同様の性格を有する人が、同様の境遇に於て、逢著すべ

き經驗なり』(『根本佛教』一〇三頁)

折ふし宮中を出で、すら、郊外の自然に出離の好縁あり、況んや全く宮中を棄て、鞭を白馬に當てたりし太子當年の靈興こそ、世にも尊く慕はしけれ。劣根子の如きさへ、既に屢々四門遊觀の餘訓を味ひぬ。願くは太子の跡を追ふて、山林靜座の友たらんとは、三十二歳の今、予が心の奥底より始めて湧き出でし熱望なりき。斯く感じたる其時より予も亦佛弟子の一人なりと自ら許すに至りたり。

釋迦は人界を遠離して、備さに六年の苦行を嘗めたり。彼は一日に一麻一米乃至七日に一麻一米を食ひ、形容枯槁、肉落ち骨現らはれ、僅かに餘喘を保つばかりなる境涯までも深入しぬ。茲に於てか彼は飄然苦

行によりては解脱の得可からざるを了悟し、尼連禪河に沐浴して、六年の汚垢を洗淨し盡くせり。思ふに彼が苦行を棄てし刹那は、成道の機縁既に熟して、光明彼が心中に耀き、われは是れ一切勝者、一切知者と宣言しつ可き自覺の曙紅を既に業に感得し居たりしならん。尼連禪河の沐浴は、ヨルダン河畔の洗禮にも比すべし。只こゝに在りては自覺の萌芽となり、彼に在りては天啓の閃光たり。耶穌はその後も曠野に逐はれて四十日四十夜の試鍊を受け、釋尊は畢波羅樹下に座して、沈思冥想、四十九日を経たり。四十九日の間、彼は惡魔波旬と戦ひて、終に最後の勝利を得たり。一篇の怪談に似通へる降魔の傳説こそ面白けれ、是れ實に健闘の戰士たり、有情の人たる釋迦の面目を遺憾なく發露せる者にあらずや。彼は畢波羅樹下の金剛座に在りて、大葛藤の中に正思を凝し、四諦十二因縁の法輪は、全く彼が心に成りぬ。あはれ正覺の

師主、人天の導師は、斯くて此世に現はれ出でたり。王宮を棄てし一沙門が三十五歳の春なりき、默座四十九日目の早晩明星の耀き出づる刹那、豁然大悟の眼開けて、彼は久遠の覺者となりぬ。あはれ煩惱五欲の凡夫も、終には最勝菩提の佛陀なり。一篇の詩に似たる釋迦傳こそは「人」てふもの、偉大を證する無上の史實に非るか。彼の踏み來し跡に於て、予は向上の最高模表を見る。

釋尊は生の歡樂を棄て、而して終に不滅の生を得たり。何處にか不滅の生を得たる、渴愛我慾の滅し盡したる處に於て之を得たりしに非ずや。解脱の第一義は、確かに我欲の滅盡に在りき。我欲を滅盡して始めて現身超絶の解脱境に入る。此境に入りし人は、貪愛を絶ち、煩惱を去りたれば、恰も燈火の油盡きて自ら滅する如く、又根なき樹の自ら枯るゝが如く、苦惱の世界、燃燒の苦界は自ら滅し了る也。斯の如き人

は、身體の障害を排し、五慾の塵埃を超え、正法真理の旗を上げたる度脱者にして、その心の状態を涅槃とは云ふ。涅槃を消極的に見れば、外境の動搖を断滅したる状態にして、之を動詞とすれば入滅するの義なり。然れども心は心行として思身として、身心一切作用の本源、五蘊の中心なり。但だ心は一切の勢用原因にして、物質原因にあらざる故に、その自由を得たるの状态は、現身物界の超絶なり、心の自證、本心の實現なり。即ち人欲の滅盡てふ消極の道を透過して、釋尊は涅槃に入りたるも、人欲の滅盡にはその中に自ら積極的なる心解脱の自在境を現はすを以て、肉體の死に依りて、十分なる無餘の涅槃に入るを待たず、現實の生命肉體現法の中に心解脱の經驗を得たりし者也。是れ實に

「身にて無餘絶對の不滅界に觸れ
有餘の離脱を實にして無漏となり

正覺者は無憂離穢の道を説く（根本佛敎）

根本の實證なりき。噫、是の如き正覺の聖者こそは、予が久しく思慕して止まざりし內的自由の證悟者に非ずや。予は嘗つて全人たらんと欲しぬ。而かも生の醍醐味に徹せんには、生の歡樂を棄捨するの眞に止む可からざるを思ひ、一片遠離の志、既に切なる者ある也。あはれ予は迦比羅城中の若き太子と心臟の鼓動を等しうする聖求の熱血漢に非ずや。太子と共に悶え太子と共に苦しめる末世の一行者には非ずや。而かも太子は既に宮中を出で、予は猶ほ街頭に彷徨す。いつまでか遂に斯くてある可き、願くは太子の跡を趁うて、その踏み行きし道を辿らん。然り否定の道を辿りて、そこに不滅の世界を見む。然らば劣根予の如きも亦釋尊其人の如く、豁然として正覺の眼花の如くに開くの日には逢はん乎。予は斯く思ひ斯く信じ、喜んで佛弟子たるを誓ひぬ。

何人に對して誓へる乎、曰く予は予が心の中に耀ける釋尊の活きたる人格を仰いで、爾の如き解脱を得る迄、爾の道を歩まむと言へる也。予は斯の如く求めたり、而して終に何物をか得たる。

八、永遠の否定

予が釋尊を戀へるは、諸欲滅盡、現身超絶の心境を戀へる也。若し能ふ可くんば此心境に到達せんと、念願轉た切なりき。而して釋尊其人は、此念願の可能を示し、菩提を求むる總ての行者に、久遠眞實の保證を與へぬ。予は此保證を信じて、猛進せんと志したり。

解脱は心の自得を要す。而かも智慧の證悟は、素より之が燈明たらずんばならず。予は努めて諸欲を放捨するの生活を營みつゝ、正座黙想、心靜かなる朝夕を海邊と松林との間に過しぬ。予が智慧證悟の第

一問題は、多欲予の如きもの果して能く諸欲を滅盡し得べきや否やにありき。思へらく、欲望は千種萬様、多岐多端にして、宛ら驛馬の群の如し、之をその儘制取せんと殆んど不可能事に屬す。少くとも予一個人の經驗に於ては、假令欲望の種類を辨じ、價值の高下を判断するの理性を失ふに至らずとするも、此事全く不可能なりき。予が全人を憧憬したる當時は、實驗に依らず思索に基いて中道觀法の則る可きを説きしかど、人欲の複雑にして且つ熱烈なる、決して斯の如く單純なるを許さず。嗚呼信なき者は禍なる哉、予の如きは難治の病を抱いて、發熱四百度に及べる時に於てすら、猶ほ世欲の爲めに煩はされて、精神の自由を失へるを歎じたり。眞個徹底の達人に非る限りは、爰んぞ欲望統制の容易なるを斷言し得べけんや。既に之を制取し調攝するの容易ならざるを知りて、而かも猶ほ之を制取し調攝する事なくしては到底安ん

じ得可からずとせば、問題は極めて嚴肅なり。欲望の一切を是認せんか、若くは一切を否定せんか。擇ぶ可きは只二途あるのみ。之を是認すれば矛盾の苦痛に堪へず、之を理性の上に否定するも、實行の上に否定するの可能なるや否やを知らず。而かも釋尊其人の前蹤は、予をして奮然否定の道に進むの當に然る可きを思はしめたり、予は欲望の一切を否定するの可能を信じて、逃往すべきのみ。然らば如何なる欲望をか先づ否定し了す可きぞ。

諸欲多しといへども、權勢の欲、事功の欲、名譽の欲、金錢の欲、及び性欲に優りて吾等を苦しむる者はあらず。憐れなる者よ、爾は難治の病床に在りてすら、猶ほ性欲を遠離し得ずと謂ふ乎。然り予は心の奥底に於て猶ほ性欲の羈絆を脱し得ざる者なり。而かも予は遂に之を一擲し得ざるべきか。予は予と家族との幸福と自由との爲めならんには、予

は喜んで性欲を遠離せん。未婚の青年と處女と互に貞潔を愛する如く、吾等は貞潔を愛するによりて心身の安穩を得べしとせば、性欲を否定し去らんこと斷じて不可能事にあらじ。畢竟未婚の當時に復歸すれば可なり。否、未婚の若き男女が抑えんとして容易に抑え難き青春の本能衝動こそは、吾等が常に遠離す可き根底の強き障害なれ。是れ豈に原始的野獸魂に非ずや。人は此野獸魂を恥ぢ、敢へて暴露せざらんと努むるも、心底の動搖は何人か能く之を免れ得ん。予も亦野獸魂を抱いて之が爲めに惱める一人なりき。然かも之を超絶するに依りて、心の平和を期すべしとせば、而して釋尊其人のみならず、多くの聖者道士にして眞に之を超絶し得たりとせば、予も亦佛弟子たり、道士たり、爰んぞ一念の斷によりて、野獸の本能を脱離し得ざる可き。予は性欲を脱離して子孫を遺さざるも可なり、願くは肉身の中に潜める聖者の

心を生長せしめて、その種子を天下に頒つを得んとは、予が松林の静座に於ける黙禱の一つなりき。予は今子孫を生むにも優れる一大事、即ち精神の自由、現身の超越を求めて精進しつゝある者なり。爰んぞ喜び且つ勇んで、性欲を棄捨し終らざらんや。古しへの人は妻を棄てて子を棄て親を棄て、さへ出家苦行の道者となりぬ。予は今家を棄てず、妻子を棄てず、親族を棄てず、性欲なんごをしも棄て得ずんば、先哲の一喝を奈何かせん。予は斯く思惟して、性欲を否定し了んぬ。

予は又久しく功名心の烈火の如く胸底に燃ゆるを覺えたり。何事をか世の爲め人の爲めに成就する處あらんとの大望心と共に、何等か自己一身の爲めに名譽と幸福とを贏ち得んとの小野心を脱すること能はざりき。斯くの如きは、決して予一個人に止らじ。總ての男子亦皆然らん。假りに大望心は之を缺くとも、小野心に至つては、誰一人とし

て之を有せざる者無けむ。斯の如き小野心に鞭れて努力奮闘する者世に之を稱して有爲の人物と云ふ。又斯の如き小野心を實現して街頭に得々然たる者、世に之を稱して成功の模範と云ふ。予も亦斯の如き有爲の人物たり、成功の模範たるを冀へり。而かも一片聖求の志、胸底に動いて終に抑止す可からず、斯の如き小野心の生活の淺薄にして無意味なるに堪ふる能はず。即ち一切の功利と名譽とを超越したる最高満足境を望んで、逃往せんとは欲する也。あゝ、功名何物ぞや、若し吾等にして生死を脱離する能はずんば、假令曠世の事業を遂げ、稀代の名譽を荷へりとも、一心猶ほ不満足にして、死の襲來を迎へざる可からず。得たる名譽、建てたる功勳すら、猶ほ且つ吾等の死を喜ばしめず、況んや飢え渴ける功名の欲心に於てをや。吾等は功名を超越して、別に久遠眞實の最高満足境を發見せざる可からず。是れ總ての發見の

中に於て最も尊む可き發見なりとす。予は斯く思ひ斯く感じて、功名心をも否定し了んぬ。

斯くして否定の道を歩まむとする決意の前には、大なる苦痛なきを得ざりしも、予は窮竟満足の爲めには、權勢も、名譽も、金錢も、事業も、畢竟塵芥に等しきを確く信するに至りたり。然らば生の根本欲たる食欲の如きは即ち如何。若し窮竟満足の爲めならんには、之をすらも猶ほ否定し得ざるにあらじ。予は幼くして一行者の傳説を聴けり。彼は生きながら墓穴の中に葬られしが、棺の内に端座して靜かに鐘を敲く音五十日間聞えたりと也。彼は食欲を絶ちて何事をか念願したりし。予は之を知らず。されど若し斯くして現身超絶、解脱涅槃の得らる可くんば、食を断ちて而して死ぬるも亦憾みなきを得可きなり。蓋し吾等の朽ち果つべき肉體を棄捨し了ることも、以て久遠眞實の生命を購ひ

得べしとせば、抑も何等の幸福ぞや。薄志子の如きも亦喜んで食欲を遠離せん。只斷食によりて自ら死を誘ふも、死は果して窮竟の安穩を吾等に齎らし來るべきや。誰か能く死後の安穩を保證し得る者ぞ。死後の安穩知る可からずとせば、自ら殺して苦を脱せんとするが如きは畢竟無益なる痴人の夢ならざらんや。素より生の中に安穩を得、解脱に達するの確實なるに若かざる也。其の道果して如何。曰く、諸欲滅盡是れ也。解脱の前には一切生欲の價值言ふに足らざるを了悟し、之に執著せず之を遠離して、心を清涼洞徹の境に遊ばしむる是れ也。先づ斯く智慧の證悟に依りて一切の生欲を空了せよ、さらば之を如實に棄捨して、繫縛を脱離すること決して難からじ。予は明かに之を自證し得たり。

予は久しく諸欲滅盡の可能を疑ひしが、茲に至りて確く之を信じ、解脱

の妙境必ずしも遠きにあらざるを感知したり。或は正座黙想、或は逍遙自適、或は動中に静を觀じ、或は静中に動を觀じ、幾多心海の波瀾を閱するは従つて、予は益々諸欲滅盡の妙味を感じ、その心境を愛慕するに至りぬ。諸欲を滅盡して、心境浩々たる。欲の主體を我といはば、既に諸欲を空了し、諸欲の本源を空了したる今となりては、無欲境は即ち無我境に非るか。あはれ無我境の慕はしさよ、予は久しく無我の一語に感ひしが、今にしてその甚深なる實驗の發露なるを知りぬ。無欲境に入つて始めて利と不利と、快と不快と、乃至一切の得失好惡を絶ちて、青天一碧、光明遍照の新しき世界に入る。こゝに新しき世界とは、煩惱を滅盡したる涅槃寂靜の靈覺真心なり。而してそこには、風も吹かず、流も流れず、有胎も生せず、日月も出沒せず。即ち是れ無爲の實在境也。こゝに至りては、單に諸欲の滅盡せるに止らずして、一切の意識も亦滅

盡す。即ち餘す所は只無記あるのみ、默あるのみ。般若空觀の極致は畢竟こゝに在るべし。

『そこには水も地も火も固定せず、

そこには星も閃かず、日も照さず、

そこには月も照らず、又暗も見えず、

寂者はそこに自ら知り、寂默によりて智者となり、

かくて色無色、苦樂を脱す。』(根本佛敎 三〇五頁)

げにも此一默こそは、無限に延長し得る否定の性質を有せる者ならむ。予は無欲境の觀想より、進んで涅槃の窮竟たる所謂無爲、無記、默の秘密を自得せんとして、宛ら禪定に髣髴たる靜座の妙趣を味へり。自ら徹底の靈感なるや否やを知らざるも、幾度か無爲の境に入りて光明に觸れ得たる心地し、始めて寂靜涅槃の何たるやを聊か實證したるを感ず。

いはゆる「月も照らず、暗も見えず、色無色苦樂を離脱せる無爲の境涯其者こそ、吾等が心の奥底にして、同時に一切生滅の最も深き源泉なれ。一心淨觀能く此境に透徹せば、最早諸の意識の在るを知らず、爰んぞ自我の意識なる者あらんや。既に意識を超越す、何ぞ個々の欲望なる者あらんや。識欲共に滅す、さらば何事も己れに拘りなく、何事も欲し得ずなりては、我ありや無しやを知らず、我ありと言はんも愚か也、我無しと言はんも未だ盡さず、未だ盡さすといへども此の心境を言ひ現はさんには、不生、不成、無作、無爲、而して又無我と呼ぶより外に、適當なる言語ありとも覺えざる也。是れ實に否定の道を行き盡して、窮竟の否定に達したる否、最後唯一の存在に達著したる刹那の實驗なればなり。無我といひ無爲と言はずして、何等か積極の言語を用ゐば、恐らくは否定の極致たる此の眞實々在の意義を明白に確實に傳達すること能は

ざらん、予は佛徒が窮竟の實在を味ひ、之を無爲涅槃と名づけたりしその心事を洞察すべく眞に餘師あるを覺ゆる者也。予は予が無欲觀より進みたる自己自照に徴して、佛徒が一切空と叫ぶの確かに不滅の眞理に合せるを信せずんば非るなり。

一切の欲望、一切の意識、總て皆是れ無爲に歸す、無爲の境涯は有にあらす無にあらす、名けて空といふも理ならずや。予は否定の道の窮る處、空觀に入りて自ら止んぬ。久しく金剛經の愛讀者なりし予は、釋尊の根本佛敎より、こゝに一超直入するの法縁既に淺からざりし也。一切空の無爲境よ、是れ豈に吾等が久遠の故郷にして、常住の樂地たる可きに非ずや。予は一切空と斷じ得て、始めて現身超絶の不滅界に直入したるを覺ゆ。噫、予は今猶ほ煩惱の子たるを免れざるか、若くは既に解脱の人とはなりけむか。予は自ら之を知らず。只予は一たび無欲、無

我、無爲の境涯に入りて、全く古き衣を脱したりと感ず、否、單に古き衣のみには非る也。予は今竊かに自ら感ふ、三十年來の予は眞の我なりしか、若くは現在の此身此儘こそは眞の我なるか。予は古き衣と共に古き我をも脱離し了せるにあらずや。

げにも予は三十年來養ひ來りし信仰も、智識も、一切の欲も、はては一切の意識すらも超越し盡して「無爲の人」とはならんとす也、否、なりつゝある者也。回光返照の退歩を學び來りて、身心漸く脱落せんとす。我どわが藻抜けの殻を顧みて、一喝「永遠の否定」と叫ぶ。噫、予は斯くして生きながら既に死の國の關門に立てり。否、死の國の關門を奮つて一起超過し了れり。

九、最高靈覺

一切空の境に直入し得たりと言はゞ、そは虛無の境かと反問する人もやあらむ。さばれ予自身の實證に照せば、そは虛無境とは謂ふ可からず、若し言説を以て形容す可くんば、不動無作なる眞實境、否、一切の活動と作爲との根源たる可き眞實境なりとや言はん。そこには雜念なく、雜意識なく、まことは動靜、作爲、無作爲、有我、無我を絶し盡して、所謂玲瓏明白、自照靈然たる感じ一つを残すのみ。感じ一つを残すといはゞ、猶ほ意識の存在を髣髴するの憾みもあらん、さらば玲瓏明白、自照靈然たる感じ其者こそ、即ち是れ一切空といひ、若くは久遠眞實といふ吾等が實證の境地なれとは謂ふべけむ。自照靈然たる感じは、一切の妄情を斷絶し盡したる「迷雲收晴」の心地也。されど是れのみにては言ひ足らず、古人が更に形容を加へて、「心月新明」と道破せるは盡きずといへども一層分明なりとす。

佛徒はその所謂無爲涅槃を説明すべく種々の苦心を凝せるも、本來の面目、本地の風光なる者、結局は默然自得する外はなく、強ひて積極的形容を試みんか、解脱の真相を失つて動もすれば感覺的聯想を誘起せんことを惟れ怖れたる者の如し。蓋し是れ全く超絶境也、彼岸也。現身超絶の人、到彼岸の人にあらざれば、總ての積極的形容は却つて徒らに迷溺を増すに過ぎざるべし。釋尊は否定の道を進んで、終に不滅界に觸れ、人類の未だ曾つて見ず逢はざりし、永遠の肯定を發見したる者なれども、偏に消極的言語を用ひて、永遠の否定を説くに専らなりしは、決して單に衆生の機根に應せし善巧方便と解すべきにあらず。彼豈に敢らに善巧方便を藉るの用意あらんや。只自ら踏み來し跡を顧み、且つ自ら到り盡せし境を思うて、最後の否定を與ふる外に發す可き一語とても無かりしならん。予の如きは釋尊の跡を尋ねて未だ幾何なら

ざる者、而かも自ら感ずるが儘を言へば、畢竟世々の佛徒が用ゐ來りし言語以上に好形容詞ありとも覺えず、妄息寂生、寂生智現、智現眞見と古人の言へるが如く、眞の見はれむが爲めに妄は息まざる可からず、而かも妄息めば自ら寂生じ、智現じ、而して眞見はるゝのみ。釋尊が諸行無常、諸法無我の二大法印より進んで、無爲涅槃の無上正覺を説破するを主として、その積極的内容に就ては多く言ふ處無きに似たる者、蓋し甚深の意義ありと謂つ可き也。彼が用ゐたりし言語の形式に拘泥して、その無爲涅槃は只虚無のみと斷じ去る如きは、學者にもあれ、佛徒にもあれ、決して釋尊の正意を汲める妥當の見解と謂ふべからず。予は佛弟子の一人として、斯く揚言すべき自らの證悟を有す。故に「根本佛教」の著者が「五蓋五障を排除する修行の中に、佛徒は深く善徳明智を増進する經驗を得しなり」と言ひ、又「佛教の窮竟理想は無爲涅槃に在るも、そ

は消滅の状態と言はんよりは、心清淨の極致を指したる者にして、從つて又死後を待たず現身生活の修養にて實現す可き状態なり」と言へる研究の成果を信する者なり。况んや心解脱の四目の中、特に第一の四無量、即ち慈愛、憐愍、喜悅、平靜の心を無限に擴大する修養の如き、明かに解脱の心境に於ける積極的意義を流露する者にして、釋尊は轉法輪の間、絶えず之を高調し給へるに於てをや。又况んや後世の所謂大乘諸經に至りては、一見無常無我の法印を破して、直ちに常樂我淨を説き、以て佛説の猶ほ未だ顯はすに及ばざりし眞實を發露したりしに於てをや。特に况んや釋尊其人が、色身を以て無爲涅槃を示し、一切空の眞實境は、最早見るべく知り得べき端嚴美妙の人格として、吾等の前に存在するに於てをや。

誰か涅槃を虚無とは謂ふ、涅槃は無上の法にあらずや、而して釋尊其人

こそは法を體得して法を身とする如來に非ずや。釋尊にして空想の産物に非るよりは、又之を信じて安心し解脱し得道したりし世々國々幾千萬の佛徒にして實在の人間ならん限りは、涅槃は虚無に非ずして無限の慈悲と無量の智慧との根本源泉たらざるを得ず。釋尊は智慧の證悟によりて此大涅槃を色身に體得し、現身にして法身たり、法身として衆生濟度の慈悲心を發起し給ひたりき。あはれ人天共に歎美せよかし、佛は即ち大慈悲是れ。無我の心より入りて、無爲の涅槃に至る、無爲の涅槃は即ち大慈悲心也。而して釋尊其人は、實にその權化也、顯現也。あゝ予が始めに、釋尊を戀へるは、その諸欲滅盡、現身超絶の心境を戀へるなりと言ひたりしは、猶ほ未だ言ひ盡せる者にあらずき。吾等一切の衆生は、彼が大慈大悲の雨露に濕ふ一莖の藥草に過ぎざる者なり。釋尊の慈顔に對する時、吾等は只感謝あるのみ讃仰あるのみ。

自ら解脱すと言はんは廣言に過ぎたらすや。釋尊あるが故に、吾等に解脱の希望もありき。釋尊の模範と保證とにして無からんか、吾等果して解脱の道を踏み窮むるを得たりしや否や、踏み初むるさへ可能なりしや否や。吾等は彼が大正覺を信じて之を力とし之を歸依とし、奮つて向上の一路を辿りぬ。吾等が釋尊を見出せるとき、釋尊の吾等を求めて既に幾劫の春を経たるを知れり。吾等は彼が慈悲に逢ひ、その道を示され救へられて、始めて歩み初めたる者也。吾等にして解脱し得たりとせんか、それは只釋尊の救済の全うせられたる成果のみ。一言にして之を盡さば、釋尊に對する吾等の信は、吾等が解脱の力なりき。さらば吾等は自ら解脱すと言はんよりも、釋尊の爲めに救はれたりと謂ふの一層適切なるに若かじ。げにも彼は正覺の真人、人天の師主たりと謂ふに止らず、吾等が心靈の救済者にてありき。少くとも予の信

眼に映する釋尊は當に是の如きの人なりき。

現身佛たる釋尊に對する信仰は、手をして法身佛たる彼を明かに了解せしめたり。法身佛としての彼は畢竟如より來りし人也、如として來りし人也。彼は人間にして同時に超人間也、彼は現在の人にして同時に久遠の人也。彼を見るものは、法を見、眞如を見、無上涅槃を見、不滅界を見、現實世界の中に内住して且つその上に超越せる最高實在を見る者なり。遮莫最高實在其者は、復た釋尊の中に在りて且つ彼の上に超然たる者なり、之を呼んで如來藏と言はんは未だ盡せる者にあらず、之を呼んで如來地といふも未だ盡せる者にあらず。絶對界といひ、超絶境といふは空間の聯想を免れず、久遠といひ、眞實といふのみにては、單にその性質の説明に過ぎず、佛といへば三世の諸佛あり。法といひ、如といふのみにては、假令體用並び備はるとは言ふもの、抽象の觀念に

止りて、未だ靈活の眞心を傳へ盡さず現はし終らず。噫、予はこゝに至りて何ぞか言はん。げにも尊き最高の實在よ、靈覺の眞心よ、空にして實なる久遠のザインよ、不生にして不滅なる無窮のウエルデンよ、光の源よ、命の泉よ。人類の言語は多くあれど、神と名くるより外に、適はむき言語ありとも覺えず。

噫、予は解脱を戀ひて而して恩寵に觸れ、無爲の涅槃に憧れて而して久遠の生命に逢ひ、一切空と悟りて而して無盡藏なる實在界に入りぬ。予は釋尊の追隨者なりき、わが蹈みし道は彼が拓きし道なりき。而して今や眼頭の光景如何。予は無爲涅槃のたゞ中に於て、明かに本地の風光を見たり、否、靈覺の眞心を見たり、否、予は確かに神を見たる也。あはれ慕はしきわが神よ。わが眼開いて、わが神よと心に叫びし一刹那、驚く可き哉、畏る可き哉、天も地も忽ち新しくなりぬ。わが眼は碧瑠

璃の青空を見わが肌は清く柔き南風に觸れ、わが心は初春の光に感じて、宛ら生れ更れるに似たり。あゝ、靈魂の復活といふは、かゝる刹那の經驗なるか。予はわが神よと叫びし時、然り、信に入りてこゝに始めて心の奥の底なき深みより新に神を見出せし時、純真無垢のわれてふものが靈彩渾然として生れ出で、光瀾の中に游泳するを覺えぬ。神の攝理の不可思議さよ、こゝに至りて過ぎ來し道を顧みれば、物皆總て奇蹟也。

十、視よ是れ此人也

予は無爲涅槃に入りて、忽然新に神を見たりと感じぬ。わが見たる神を如何にしてか茲に髣髴せしめ得ん。わが筆と言語とは、餘りに貧しく力無し。予は天來の靈感を傳ふべき、藝術家の才能を有せざる者な

り。予は語らずして止みなむ乎。

予は只感じの儘を語らむ、そは空也、實也、自由也、清淨也、光明也、生命也、溢るゝ力也、温き情緒也、慈愛也、權威也、否、その總てが渾然たる靈覺の真心、本來の實在也。之を透觀し盡さんは素より能ふべしとも覺えず、況んや定義するに於てをや。神は天地と共に在り、天地の中に在れども、天地よりも限りなく偉大なる者なり、之を見てわが心は忽ち引きつけられ、あゝわが神よと歎じて慕ひ仰ぐより外に發すべき言葉もあらざる也。あゝわが神よ、爾を見し予は友の如く兄弟の如く、否、友よりも兄弟よりも更に親しむべく尊むべく畏るべき心地を覺ゆるは如何に。予は解脱を求めて涅槃に入り、涅槃に入りて而して圖らずも爾の大なる光に逢ひぬ。爾に逢うてわが神よと思はず叫びたりしその刹那、わが斯く叫ぶより以前に、久遠の淵より來るが如き爾の深く幽けき聲のわ

が名を呼ぶを感じたるは如何に。あゝ爾は何物ぞや。

予は神を見たりと感せし時より、神に就て深き思惟を凝しぬ。而して世々の哲學と神學との廣遠なる造詣を以てして、猶ほ未だ其本體實相を窮め得ざるを確めたり。——げにも人にして神なる耶蘇を知らず、又自らの中に神を見ざりしならば、神は長しへに不可知なるべし——否、今にして猶ほ神の有無論に没頭する多くの思想家あるを知れり。憐れむ可き哉、群小哲學者よ、卿等は何の權威ありて神の存在を否定するぞ。神とは本來何物なるか。卿等は神を否定する前に、此問題に答へざる可からず。吾等が證悟し得る絶對の實在、吾等が感受し得る最高の價值、吾等が心靈の奥底に於て一切の否定を絶したる唯一の肯定、然り最高靈覺の本體其者を自得せずして、神を有りといひ無しといふ閑葛藤に囚はるゝは誰ぞや。吾等は神の有無を論する前に、知らざる

神を知らざる可からず、見えざる神を見ざる可からず、然り先づ神を求めざる可からざる也。神を何處に求むべきか、予は久しく迷ひて哲學に行き、佛敎に行き、基督敎に行き、最後に至る處に於て之を發見し得たるを感ず。求めよさらば與へられむと云へる古聖の約束を世の人は何ぞか聽ける。予は求めぬ、而して與へられぬ、否、予が求めたりしその以前よりして、既に業に求むる處の與へられ居りしを深く感謝せずんばあらざりき。あはれ誰かは能く之を與へ給ひけむ。

予は嬉しくも日本に生れ出でしが故に、既に搖籃の時代に於て釋尊の光明に觸るゝを得たり。即ち予は母の懷に在りて、寺に參り墓に詣で、不知不識、大慈大悲の法雨に沐浴したりし也。予は又幸にして特に明治の新しい日本に生れ逢ひしが故に、小學に入る以前に於て、覺束なくも耶蘇の神彩を感じ居たりき。即ち予は幼にして天主教會の讚美歌

を喜び、聖徒の畫像を玩び、フランス宣敎師の手より貴金色なす十字架を與へられて、無意味ながらも之を貴重視しき。予は成年の後に於て、深く基督敎徒の品性に感じ、此方面より信仰に進みて、神を知り基督を知り、そめしが、受洗後十年間、信仰の根本に於ては、殆んど何等の變化も無かりき。只此間に在りて、清新なる信念を抱ける佛敎學者の中に二三の師友を得て、久しく忘れ居たりし釋尊其人と及び其敎法とに對する興味を復活し、東西の聖者を一心の中に會して、而かも未だ自ら歸趣を知らざるの嘆を免れざりしが、今や予は最早昨日の予に非ず。一たび近世思想の自我に歸りて、こゝより新らしく出立したりし予は、全人の理想より、一超飛躍して釋尊の跡を趁ひ、而して遂に無爲の涅槃の中に、神を感悟し得たる也。茲に至りて圖らずナザレの耶蘇を顧みれば、噫、彼が品性と生涯と思想と事業との、如何なれば斯くも崇嚴莊美にし

て靈彩陸離たるや。釋尊は眞に東方第一の人也。而かも斯人を以てしても、猶ほ二十九年の修養と六年の苦行とを通じて始めて、正覺の域には入りし也。彼は否定の道を歩み、否定の道を説き、自らは永遠の肯定に達しながらも、猶ほ此世と彼世とを一如たらしむるに至らざりき。あはれ耶蘇は何人なれば、生れながら一切の繫縛を超越し盡して、清く、高く、深く、雄々しく、直ちに天上の靈火を捉へ來つて地上に投するの概ありしや。古今東西英雄聖者多しといへども、釋尊すら猶ほ斯の如きを得ず、況んや其他に於てをや。彼は單に西方第一の人たるに止らず、實に東西古今絶類獨歩の人也、見よ是れ此人こそはヒューマニチーに現はれたる最高のデヴ・フィニチーには非るか。稱して天來の神人といふ、寧ろ形容の盡きざるを想ふ。嗚呼、感謝すべきかな、讚美す可きかな、吾等の神よ、爾は吾等の中より釋尊を興して、夙に向上の模表を垂れ、又

吾等の中に耶蘇を賜ひて、こゝに無限の慈愛を示しぬ。あはれ釋尊こそは人よりして神に至れる者、耶蘇こそは神よりして人に至りし者、彼は人てふ者の最高代表者にして、此は神其者の唯一なる化身なり。福なるかな、病弱子の如きすら、日本の國土に生れしが故に、明治の昭代に生れしが故に、釋尊を知り、又耶蘇を知り、こゝに無限の恩寵を感じ、こゝに久遠の生命を享く。而かも予が此を知り、彼を知る前に、神は不可思議の攝理によりて、千萬劫の古しへより、この一眞實を開顯し給へる也。神より外に善き者は無し、神より上に尊きは無し。されば神にして人たる耶蘇にも優して、尊き善き者は此世にあらず。故に曰く、人類の最大幸福は、神と耶蘇基督とを知る是れ也。予は此幸福を感じる一人として、耶蘇の齎せる福音の眞髓をこゝに開顯せんと欲す。蓋し基督教の根本使命は、人をして此最大幸福を享樂

せしめんとするに在り。只衆生の心眼猶ほ未だ開くに至らず、樂園の現前を悟らずして、空しく苦海に沈淪し、古聖の慈愛を忘れはて、徒に無慚の誹謗を逞うす。或る意味に於て、現代は即ち末世にして、當に最後審判の時也。新しき民は之より起り、新しき世は之より開け、新しき文明は之より大に勃興し來る可き時也。予は此希望を深く心底に藏するが故に、其國土を開拓すべき最初の鋤をこゝに容れむとはす也。

本論前篇

耶蘇の福音

第一章 神の國の福音

予は全人より釋迦に往き、釋迦より終に耶蘇に歸りぬ。耶蘇は果して如何なる人ぞ。

ナザレの耶蘇は大工の子なりき。その父はヨセフ、その母はマリヤ、多くの兄弟と共に家居して、靜默三十年を経たり。一朝ヨルダンの河畔に出で、洗禮をヨハネに受くるや、爾は我が愛子我が悦ぶ所の者なりてふ天來の默示に動され、終に起ちて道をガリラヤ湖邊に宣へぬ。ガ

リラヤ湖邊に現はれし耶蘇は、權威ある説教家にして同時に慈愛深き救療者なりき。彼は自ら宣明して總ての疲れたる者、重きを負へる者、病める者、貧しき者、罪ある者の友なりと言ひぬ。而かも彼の智慧と力とに驚ける民は、彼を以て再來の豫言者なりとし、彼の弟子は彼を以て神の子、基督なりとし、而して耶蘇も亦之を是認する者の如くなりき。耶蘇は此與望と自覺を抱き、イスラエルの年祭を機會として、神意を高標せんと欲し、敢然エルサレムの都城に入りて、神殿を潔め、學者を警しめ、祭司とパリサイ人との偽善を責めぬ。教敵は忽ち奮起したり。耶蘇は民を迷はし神を潰せる大罪人と目せられ、終に捕へられて十字架に磔殺せられぬ。羅馬の代官ピラトは其上に罪標を立て、ユダヤ人の王と書けり。げにも大工の子たりし耶蘇は、ユダヤ人の王として殺されしが、世々國々の總ての信徒は、星霜こゝに一千九百年間、ガイザ

リア、ピリビに於ける彼得の告白の如く、靈界の王者、救世の師主、基督として彼を尊奉する也。大工の子、罪人の友、十字架上の王は、如何なれば久遠の基督として、人類の信仰を麻ち得たりし乎。是れ實に萬古の尊き秘密也。而かも此秘密の庫を開くべき鍵鑰は、夙に與へられぬ、耶蘇の人格と其生涯是れ也。耶蘇は一千九百年前のイスラエル人に向つて福音を傳へしも、それは單にイスラエル人の福音にはあらず、實に萬民の福音たる也。耶蘇はガラヤの湖畔、エルサレムの神殿に於て、口を啓き、眉を昂げつゝ、大説教を試み給ひしが、その聲は猶ほ吾等の耳に在り。耳ありて聽く者は、福なる哉、その人は一千九百年後の今日に於ても、耶蘇の靈感より溢れ出づる不滅の福音に觸れ得る也。

さらば耶蘇が福音の第一聲は何なりしか。「神の國は近けり悔い改めよ」。噫、是れ耶蘇が此世に於ける最初の宣言にてありき。今も猶ほその聲は、銀鈴の如く鳴り響く也。神の國は近けり悔い改めよ。耳ありて聽ゆる者は聽くべし、目ありて見ゆる者は見るべし、久遠の福音は、此の一聲の中に生れ出でぬ。

一、神の國とは何ぞや

實に耶蘇の萬民に與へたる最大の恩賜は、神の國の福音にてありき。神の國とは果して何ぞや。予は時代思潮と民族精神との汚塵を全く洗淨し盡して、純粹無雜なる神國觀念を茲に開顯せんと欲す。夫れ神の國とは、靈的生命是れ也。神を主として之に仕ふる心靈の王國是れ也。吾等の心靈は久遠且眞實の生命なる可きが故に、聖書に之を永

生いのちと言へり。永生と神國とは含著する處に廣狹の差はあれど、根本義に於ては全く同一也。人の靈性が神と繋り神と結び神と一つなるによりて、こゝに無窮の生を享く。之を朽ち果つ可き肉體の生命に對照して永遠の生命とは稱する也。永遠とし言へば時間的に長久なるを暗示するに似たれど、實は時間を超越する絶對の生命を意味するに外ならず。故に稱して永生に入るとは、吾等が靈的生命の神に繋るを得するの謂ひにして、即ち心靈の王國を先づ我が精神の中に發見する是れ也。何をか人生の第一義とは謂ふ、心靈の王國を發見する是れなり、心靈の王國は爾等が眼頭に在り、眼を開いて之を視よとは、耶蘇が初發の福音にして、而して實に二十世紀の今日に於ても、生氣激洩、含著無量なる清新の啓示たらずんば非る也。

讀者或は言はん。洗禮のヨハネが野に叫びし日も神の國は近けり

悔い改めよと言へり。耶蘇も亦同一語を放たれたり。兩者果して共に靈的生命の天國眼頭に在りと揚言したる者乎否乎。ヨハネは主として神の國を來る可き審判の日と解し、耶蘇は之に加ふるに恩寵の意義を以てしたるも、猶ほ當年の時代思潮たる末世の觀想を脱却し得ざりしに非ずや。且彼等の神の國は必ずしも心靈の王國にあらず、そは目に見ゆる神の支配にして、神を信する諸の國民が愉快に飲食するの國にあらざりしや。況して耶蘇の精神的に之を醇化したるに拘らず、神の國てふ一語の中には、本來イスラエルの國家的政治的黃金時代の幻影を宿すを見よ。而して此神の支配の國たる、必ずしも眼頭に在りと言ふにあらず、寧ろ將來に於て顯はる可かりしに非ずや。且つその日の何時如何にして來る可きかは、人類の測り得可き者にあらず、そは只神の知り給ふ處、恐らくは突如として驚

くに堪へたるの光景を現じ來るならんとは、聖書に記されたる當時の思想にあらずや。然らば神の國は近けりてふ警句を解して、心靈の王國眼頭に在りと爲すは恐らく妥當なる者に非ずと、讀者よ、斯くの如きは學者の口より聽く所にして、素より多少の根據無きにあらざるも、未だ徹底の見と謂ふ可からず。耶蘇の説教に現はれたる神の國の思想の中には、未來的現實的若くは末世的戲曲的要素あるも、一たびその根本精神を汲めば、純雜立ろに明了す可し。後章猶ほ之を詳論す可きも、予は予が解釋に於て始めて、普遍且永遠なる福音の價値を顯彰し得可しと信す。讀者幸に惑ふ所なくして、直ちに聖教の神髓に參すべし。

二、山上説教の一大眼目

耶蘇の使命は深遠高大にして、全局を一語に約するの容易ならざるを覺ゆるも、神の國の福音は、之を包含し盡して略ぼ遺憾無きに邇し。耶蘇は神に仕ふる生活即ち靈的生命の王國を色身に體達するを以て、人生の第一義諦と爲し、久遠の生命、眞實の幸福は、只こゝに在るを垂示したり。是れ豈に不朽の福音に非ずや。試みに山上の説教を聴け。

馬太傳第六章廿二卅三節に曰く。『身キミの光は目なり、若し爾の目メ瞭かならば全身も亦明かなるべし。若し爾の目メ眩メからば全身暗メかるべし。是故に爾の中の光若し暗からば、その暗きこと如何に大ならず乎。』人ヒトは二人の主キミに事ふること能はず、そは此を惡み彼を愛し、此を親しみ彼を疎むべければ也。爾等神と財カネとニ兼ね事ふること能はず。是故に我爾等に告げん、生命の爲めに何を食ひ何を飲み又身體の爲めに何を衣んと憂慮ふこと勿れ、生命は糧より優

り身體は衣よりも優れる者ならず乎。』天空の鳥を見よ、稼くことカなく穡カることをせず、倉クラに蓄ふること無し、然るに爾等の天の父は之を養ひ給へり、爾等之よりも大に勝ぐる者ならず乎。』爾曹の中ナカ誰か能く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや。』又何故に衣のキことを思ひ煩らふや、野の百合花は如何にして長つかを思へ勞めず紡がざる也。』我爾等に告げんソロモンの榮華の極みの時だにもその装ひこの花の一つに及ばざりき。』神は今日野に在りて明日ア墟クサに投入れらるゝ草をも如此装はせ給へば況して爾等をや、嗚呼信シ仰シうシすシき者シよ、然れば何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひ煩らふ勿れ、是れ皆異邦人の求むる者なり、爾曹の天の父は凡て此等の物の無くてならぬ事を知り給へり。』爾曹まづ神の國と其義とを求めよ、然らば此等の物は皆爾等に加へらるべし。』(路加傳第十二章廿

二一卅四節參照

此大説教の眼目は、『爾曹先づ神の國と其義とを求めよ』の一句に在り。而して『神の國は近けり悔い改めよ』てふ初發の警語を對照し來れば、茲に掲げたる聖訓は、恐らく耶蘇が傳道期間に於ける總ての説教の序文と見るべく、又同時に概論とも認め得べし。耶蘇は只此一説教のみを以てしても、優に世界第一流の詩人と哲學者とを超越せる不可思議の天才を發露したりと謂ふべき也。

予をして少しく註脚を加へしめよ。此説教に於て耶蘇は先づ、人の價値は靈的生命即ち心靈に依りて決定せらる可きを言へり。『爾の中の光若し暗からば、その暗きこと如何に大ならず乎』とは蓋し其謂ひ也。人或は爾の中の光と言へるを解して、單に智慧を意味すと爲すもあれど、智慧といふのみにては未だ盡さず、神を認むる眼識の義に於ては、確か

に智慧たるを失はざれど、神を認めて之を愛し之に仕ふる全精神の活動を總稱して身の中の光即ち靈的生命と見るの適切なるに若かず、智慧は素より其中に在る也。約翰傳第一章四節に『この生いのちは人の光なり』と言へるは即ち是れ。身の中なる光明は、心靈に存し、心靈は神より出で、神に歸し、神の中に生き神と共に在り。故に心靈の光耀を感ずるの時は、即ち神を見出して神と共に在るを自覺せる時なり。而かも今古幾億萬の人、心靈の暗きに住まざる者果して幾何かありとす可き。げにも吾等は何を食ひ何を飲み何を衣んとて憂苦しつゝある也。衣食住の問題は、今も猶ほ古しへの如く、人の精力の殆んど全部を奪ひ盡さでは止まざる也。否、衣といひ食といひ住といふが如き肉に就ける慾の一切を外にしては、復た人なく人生なき迄に、吾等は慾に囚はれたり。慾の目的物は財なり、財は即ち吾等の主なり、吾等は之が爲めに役

せられて日夕營々たり、而かも財を拜して獨り慰めんとするも、心眼明滅、時として生存の意義を疑ふの悲哀を脱却し得ざるなり。憐れむ可き人生よ、まこと吾等が中なる光の暗きこと如何に大ならず乎、吾等は財に仕へつゝも神を慕ふの衷情に於て眞に止む可からざる者ある也。よしさらば神と財とに兼ね仕へん乎、耶蘇は斷じて宣はく、人は二人の主に従ふ能はずと。神と財とは並び立たず、吾等はその孰れに向つてか、最高價値を置かんとする。是れ豈に沈痛なる問題にあらずや。吾等は何をか食ひ何をか飲み何をか衣る事無くしては、一日も晏如たる能はざるに、耶蘇は斷じて之を思ひ煩ふ可からずといふ。若し耶蘇の言に従はんとせば、吾等は五慾の生活を超越するの覺悟なかる可からず。然り耶蘇は實に此の覺悟を要求し給ふ者也。彼は肉體の生命よりも、此世の總ての財よりも、更に尊く美しき久遠の生命不壞の財を

求めよと仰ふせ給ふ也。『蠶くひ鏽くさり、盜穿ちて竊む所の地に財を蓄ふる勿れ、蠶食ひ鏽くさり盜穿ちて竊まざる所の天に財を蓄ふべし』(馬太傳六〇十九―廿)とはその絶えず高調する所なりき。『貪心を慎しめよ、夫れ人の生命は所蓄の饒かなるには因らざる也』(路加傳十二〇十五)。貧しき者は猶ほ天國を有つの福あれど、神に就て富まざる者は、最も憐れむ可き貧民なりとは耶蘇の動かざる信念なりき。然らば吾等は須らく先づ糧よりも優りたる生命、衣よりも優りたる身體、即ち肉に就ける一切の要求を超越して、心靈の光明を耀かす可く全力を盡さる可からざる也。財に仕ふるの生活を棄て、神に事ふるの生活に入らずんばある可からざる也。『爾等先づ神の國と其義とを求めよ』即ち心靈の王國と其法則とを求めよとは蓋し此意に外ならず。

三、耶蘇の歩める超越道

耶蘇は如何にして生活問題を眼中に置かざるを得し乎、否、如何にして肉に就ける總ての財を全く超越し得たりし乎。恐くは是れ謂ふ迄もなく久遠の命と不壞の財とより外には、價値ある者を認めざりければ也。されど同時に耶蘇の眼には、萬物皆是れ恩寵也、天父の愛の顯現也、總ての物は神より出で、神は總てを保ち給ふ、神は與へ神は養ふ、誰人か能く思ひ煩ひて、その生命を寸陰も延べ得んや、而かも天の父は無くてならぬ總てを知り給ふとは、耶蘇の温き信仰なりき。故に稼がず穡らざる空の鳥にも、耶蘇は黙して語らざる天父の慈しみを直觀したり。勞めず紡がざる野の百合花にも、ソロモンの榮華すら及ばざりし美のみ恵みを感得したり。耶蘇の眼に映じたる一切の自然は、愛の耀ける

色彩なりき、神の心の流露なりき、聲なき天來の啓示なりき。『神は萬物を我に與へ給へり』と耶蘇の宣ひしも宜なるかな。彼は萬物の謎を解くべき不可思議の鍵を有ち給ひて、萬物の心を讀みたりし也。彼は天父の愛を信すると同時に、稼がず穡らす倉に蓄ふることも無き鳥の自由を喜びぬ。彼は又今日野に在りて明日は墟に投げらるゝ草の花を、果敢なき者とは傷み悲しまさりき。彼は野の花空の鳥に於て、全く生死を超越せる萬物存在の意義を見たり、然り天父の愛と榮光とを見たり。而して更に一轉語を下して曰く、爾曹は之よりも大に勝るゝ者ならず乎、嗚呼信仰うすき者よと。耶蘇は天父の愛に就て、深き信仰を有するが故に、全く生死の外に超然として神意に順從するを得たり。若し吾等にして耶蘇の信に倣ひ、一切を棄て、只蕩地に、心靈の王國とそ法の則とを求めんか、即ち是れ聖求の志を發したる者なり、此志にして

堅固ならんには、飢うると雖飢を知らず、渴すと雖渴を知らず、朝に道を
聴けば夕に死すとも可なりと言へる古聖の喜びを實驗するに至らん。
彼の衣食住の如きは之が爲めに思ひ煩へば惟れ日も足らざる憾みあ
らむも、一日の苦勞は一日にて足れり、明日の事を憂慮ふ勿れてよ聖訓
の主旨を體すれば、一心悠々、春風長しへに閑かに、肉に囚はれずして肉
を楽しむの妙境に臻ること難しとせず。吾等の髮の毛も亦數へらる、
況して人生の必需物を天父の閑却し給ふ理あらんや。信する者にと
りては飽食も不可ならず、斷食も亦可也。總て衣食住の問題は、最早意と
するに足らざる也。而かも人類の最大多數は、徒らに何を食ひ何を飲
み何を衣んとて思ひ煩ふに非ずや、斯く思ひ煩ふ所以の者は、肉の生命
より以上に尊き或物を知らざれば也、此世の財より以上に仕ふ可き主
あるを知らざれば也。彼等はアブラハムの子孫なりとしふも、實は靈

界の異邦人のみ。人生の尊貴を悟らずして、野の花空の鳥にすらも及
ばざる者は憐れむ可きかな。されば我れ今爾等の爲めに久遠眞實な
る心靈の王國を示さんとす、目を啓いて此國を視、心を開いて此國を享
くる者は福なるかな。爾等思を飲食に絶ちて、速かに聖求の志を發せ
よとば、耶蘇が説教の根本旨趣なりき。

第二章 神の國の本質

予は神の國を解して、靈的生命即ち神を主として之に仕ふるの生活な
りと謂へり。されど單に神に仕ふるの生活と言はば、神の國は只個人
の靈性の中にのみ存する者の如く聞ゆるならん。然らば是れ未だ神
の國の意義を盡し得ざる者なり。神の國は單なる靈性のみ生活に
あらずして、靈性を根本生命とする人生其者は是れなり。耶蘇は色身の

「人を離れて神の國を説き給はざりき。人若し新に生れなば、色身その儘にして神の國に入るべしと彼は思惟しぬ。又神の國は獨り個人にのみ存するにあらずして、神の支配の普き現實の社會其者は是れなり。神國に關する耶蘇の説教が、常に宛ら目に見ゆる現世の如き觀あるは、蓋し耶蘇の心中に絶えず此國の實現を豫期し給ひたれば也。さばれ神の國の觀念が此種の現實的社會的内容を含蓄するの故を以て、その莊觀に眩惑するの餘り、微にして且つ幽かなる本來の性質を忘却し去らば、是れ實に神の國の眞髓を失へる者なり。神の國の眞髓は、全く神に仕ふるの精神に在り。神に繋る心靈の生活に在り。神に仕へ神に繋るてふ根本自覺の故に、久遠にして且つ眞實なる生命に觸るゝの實際信樂に在り。是れ實に宗教の奧義にして、福音の中心眼目たり。耶蘇は幾多の美しき譬喩を以て、此の奧義を開顯し給ひたり。有名な

る天國の譬即ち是れ也——聖書に所謂天國とは、神の國と全く同一義なり——天國の譬は種々の方面より解釋し得べきも、今は専ら神の國の性質を闡明するの目的を以て、試に之を研究せん。

一、天國は人生の最高價值なり

何を以てか之を謂ふ、耶蘇宣く、「天國は畑に藏れたる寶の如し」と。(馬太十三〇四十四)之を見出したる人は、その所有を盡く賣りて之を買ふ程に貴重なる寶なり。然り、靈的生命こそは、人生の最高價值たる也。肉に就ける一切の物を失ふとも、此生命一つは求めざるを得ざる也。耶蘇又宣く、「天國は好き眞珠を求めんとする商人の如し」と。(馬太十三〇四十五)げにも吾等の靈的生命は高價なる好き眞珠なり、賢き商人は其所有を盡く賣りても、之を買はざるを得ざる也。吾等は先づ靈的生命

を斯くの如くに評價するを要す。總ての所有にも優りて、尊き寶と好
き眞珠とを發見したる人は福なる哉。如是の寶と眞珠とを我が心中
に懷きながら、之を發見し得ざる者は禍なる哉。宜しく速かに耶蘇に
來れ、彼は爾等の眼を開かん。

二、天國は進化發展する生命なり

耶蘇は播種の喩を以て、屢々天國の奧義を語れり、而して彼自らの解説
に依れば、播くところの種は即ち神の道ミチなり、神の道は即ち神の意思、神
の意思は即ち神の生命、神その生命を人類に與へて、地上の發展を試む
とは、蓋し耶蘇の著想なりしならん。播種の喩の一つに曰く、「神の國は
何に比へ何の譬を以て之を喩へん、一粒の芥種の如し、之を地に播く時
は百様の種より微けれど、既に播きて萌出づれば百様の野菜よりは大

く且つ巨なる枝を出して、空の鳥その蔭に棲む程に及るなり」馬可四〇
卅一卅二。この譬喩は、靈的生命の發展力が極めて迅速著大にして、人
の耳目を驚かすを謂へる也。その始め「百様の種より微なるは、靈的生
命の猶ほ未だ人心の奥に隠るゝ状態を意味し、「百様の野菜より大く且
つ巨いなる枝を出すとは、その進化の異常にして、何等か不可思議なる
力の、その根底に潜めるを暗示し、「空の鳥その蔭に棲むとは、靈化の天地
に普ねく、恩寵の萬物に及ぶを形容する也。元來芥種は一夏の中に生
長する者なりといへば、耶蘇は此譬喩によりて、靈的生命の潛勢力と發
展力との決して尋常一様に非るを垂示し、その力の根本を神に歸した
る也。人或は此譬を以て、神の國が突如として奇蹟的に顯現するを意
味すと爲せども恐くは當らず。地に播かれ、萌え出で、枝を生じ、鳥の棲
む迄には、短き期間とはいへども自然の秩序あり、只神の國は芥種の如

く、隠れたるより顯はになり、微きより巨いなるに至る進化發展の道程と速度とに於て、異常の力を現する也。而して此力は神より來れる恩寵として吾等の靈性に感せらるゝ所のものなり。天國が進化發展の生命たるべき一適例は他にもあり。曰く「神の國は人種を地に播くが如し、日夜起臥する間に、種生えいで、成長そだても、その然る故を知らず、夫れ地は自から實を結ぶ者にして、初には苗、次に穂出で、穂の中に熟したる穀を結ぶ、既に熟れば、穫時至るによりて直ちに鎌を入れさす也」馬可四〇廿六―廿九。此譬の眼目は、寧ろ地は自ら實を結ぶといひ、若くは最後の鎌を入れさすといふ結句に在らんも、初には苗つぎには穂いで穂の中に穀を結ぶといふは、神の國の出現が進化發展の徑路を取るの暗示と見るべくして、その來るや地震の如く電光の如く奇蹟的突發的なりといふの思想は、只一面の觀察のみ。

三、天國は精神的感化力なり

麩酵の比喻は、芥種の夫れと相俟ちて、神の國の性質を説明す。芥種は靈性夫自身の生長發展を示し、麩酵は感化力の發揮を指す者なり。曰く「天國は麩酵の如し、婦之を取り三斗の粉の中に藏せば、悉く脹發すなり」(馬太十三〇卅三)。夫れ靈的生命は自ら生長する而已ならず、人をして亦生長せしむ、他を同化する方面より見れば、是れ正しく膨脹力也。自ら得たる處を他に傳ふる方面より見れば、是れ正しく感化力なり。パリサイ人の麩酵が、偽善の勢力を代表すると異り、天國の麩酵は、素より聖善の生命を代表す。耶蘇は嘗つて弟子達に向ひ、パリサイ人の麩酵を慎めよと教へぬ。弟子達は容易に悟り得ざりき、蓋し偽善と聖善とは一見甚だ酷似する者なれば也。而かも偽善は畢竟稗子なり、その

熟して現はるゝの日は、神之を焼き棄てん。聖善は美種より出でたる
麥なり、神之を刈り採りて天上の倉に收めん。久遠にして眞實なる生
命は、聖善の道を踏む者の獨り享樂し得べき所なり。故に吾等は天國
の麴酵を以て、パリサイ人の麴酵を同化し盡すの覺悟なかる可からず。
否、天國の麴酵は、本來如是の大感化力を有する者として、耶蘇の齎し來
れる者なり。耶蘇を信じ、神を信すと稱する人々にして、若し麴酵の膨
脹力と感化力とを缺かば、其人は未だ天國を有せざる者なり。

四、天國は内的自由の生活なり

馬太傳第十三章は、全篇殆んど天國の譬喩なり。耶蘇諸の譬喩を語り
而して最後に宣く、「天國に就て教へられたる學者は、新しき物と舊き物
とを其庫より出す家の主の如し」と。こゝに所謂學者とは、思ふに親し

く耶蘇に師事せる直弟子達を指せるならん。彼等は本來學者にあらず、又一たびも耶蘇の口よりして學者と呼ばれたる事あらず、かねて耶蘇は學者を重んぜずして寧ろ嬰兒を尊びぬ、今故らに直弟子を指して學者といへるは其意を解し難きに似たり。されど耶蘇の眼より見れば、舊約聖書に精通したる當時の猶太教學者よりも寧ろ嬰兒の心を以て天國の福音を受くる者は、眞の學者と謂ふべかりしならん。「教へられたる學者の一句之を説明して餘りあるを覺ゆ。斯の如き學者、即ち眞の智慧ある人は、立ろに物の新舊を辨する家の主の如く、事に當りて礙滯せず、理を察する穎敏にして、明暗正邪の判断に於ても恐くは惑ふ所なかる可き也。その人は既に天國を知る、即ち人生の最高價值は、日月の如く明かに懸りて彼を照覽するが故に、事物一切の價值悉く瞭然たるを覺えむ。吾等が意志の不自由を感ずるは、畢竟價值判断に於て

惑ふ所多ければ也。價值判断に於て惑ふ所多きは、畢竟最高價值を知らざれば也。今既に天國の福音を聴く、吾等は肉に就ける一切の權威を棄て、久遠眞實なる靈的生命の前に無上の寶冠を捧げたる者なり。最高價值を知る者は、同時に一切の價值を知る、之を知りて惑ふ所なきが故に、始めて自由の境涯開く。人若し神の國に入らずんば、彼は到底永しへに獄中の客たるを免れざる也。

五、天國は神の恩賜なり

吾等は既に天國の人生に於ける最高價值なるを知れり。而して此の隠れたる寶好き眞珠は本來自ら存する者にして、吾等の創造を俟つて始めて顯現するには非る也。吾等が力の及ぶ處は、只之を發見するの一事に在るのみ。此の一事は實に大事にして且つ萬事なるべし。さ

れど天國本來の價值は人の評價を俟たずして絶對的に存するなり。少くとも隠れたる寶好き眞珠の光明其者は、自照靈然として劫初以來毫も渝る處あるに非るなり。此寶と眞珠とは是れ果して何物にして又何處より來れる。曰く、即ち是れ神の物にして神より來れる者、人より言へば神の恩寵たり、神より言へば神夫自身なり。吾等一たび眼を啓いて寶と眞珠とを發見せば、更に進んで此の秘密を洞觀するの明無かる可からず。芥種の喩に於ても亦之と同じ、芥種の成長は驚心駭目に堪へたれど、人は只之に灌ぎ之を培ふに過ぎず、種子其者は自然の産物にして人の造り得る處にあらず、只神の創造し給へる者なり。且つ假令之に灌ぎ之を培ふとも、日と雨との恩寵なくしては、芥種の成長得て期す可きに非る也。即ち知るべし進化發展する吾等の靈的生命は、本來神より來り神によりて養はるゝ、天來の恩賜に外ならざるを。故

に人一たび眼を啓いて芥種の生長する所以を思へば、直ちに神恩を悟得して、報謝の念を煥發す可きなり。馬可傳にのみ固有なる播種の譬(四〇廿六、廿九)は、特に能く此一大眞實を開顯したる者にして、夫れ地は自ら實を結ぶといへるは、正しく穀物成熟の根本原因を尋ねて、人力を絶したる神の恩寵に歸する者なり。麴酵の譬も此旨趣無しとせず、之を取りて三斗の粉に加ふる婦の努力に俟つと雖も、之を膨脹せしむる根本の力は彼女の創造する所にあらず、即ち神の恩寵たる也。「新しき物と舊き物とを其庫より出す商人」の譬喻も亦自ら此旨趣あり、如是の自由を得る學者は、天國に就て教へられたる「人々」なり。此教は何物なるか、耶蘇は最も有名なる播種の譬喻に於て、自ら譬喻の意義を釋き、「種は即ち神の道なり」と謂へり。神の國が天來の恩寵なるをしみて、感得するに至りて、始めて吾等は神に繋り神と結び神の國に入る者也。

第三章 神の國の奧義

斯くして吾等は神の國の最高價值たり、靈的生命たり、精神的膨脹力たり、内的自由の境涯たり、而して天來の恩寵たるを知る。耶蘇は此國の近きを宣べて、之を求むるの心を發せしめ、總ての人に希望を與ふると同時に其悔改を促したり。耶蘇は又此國の既に顯れたるを示して、直ちに人心の要求に應へ、其眞相を視る可く聽く可きものとして眼頭に活現せしめたり。而かも耶蘇は亦此國の來る何れの日なるかを知らず之を知る者は只天に在す神のみなりとして、吾等が眼に視耳に聽く處の者の決して總てに非るを説示し、之によりて聖求の志を勵し、光耀無涯なる神國生活の奧義を勞働せしめ給ひたり。——あはれ神の國

は久遠の昔より在りき、是れ本來神の道なるが故に、神と偕に今も昔も在れば也。されば神の國は近きに在り。吾等若し翻然悔改して、全く新に更生したらんか、神の國は直ちに我有となるべし。且つ試に眼を開け。神の國は既に顯はれたり。吾等若し、嬰兒の如き謙遜の心を以て、耶蘇其人の品格と事業とを觀んか、疑もなく神の國は正しく眼頭に在るを感得す可き也。而かも神の國は猶ほ未來の者なるべし。思へ、眞の光は既に耀げども人之を視て信する能はざるなり。眞の道は既に現はれたれど、人之を聽いて悟る能はざるなり。さらば若し理想の實現が永遠の不可能ならざる限り、何れの日か此世に於て、價值顛倒の精神的大活劇起らん。その日は革命の白旗の如く、突如として勃發するか、或は進化の徑路を辿りて靜かに且つ確かなる歩を進むるか、之を知るものは實に父なる神あるのみ。吾等は只その日の來るを豫期し

渴仰し而して之が準備を努む可きなり。耶蘇は此世の奸惡を憎み、此日此時の俄然として出現し來る可きを確信すると同時に、之を豫告し之を待望したり。——茲に至りてか吾等は知る、神の國は久遠の過去と、眼頭の現在と、不可測の未來とを一貫する靈的生命なることを。此生命は人心の奥底に潜める精神の力にして、神より來り神に歸るべき聖靈其者なり。人若し端的に之を直觀せんと欲せば、總てを棄て、先づ來り視よ。ナザレの耶蘇こそは誠に是れ此人也。ナザレの耶蘇に於て、活きたる聖靈を見、目に顯はれざる神を見、目に顯はなる神の國を見る者は福なる哉。彼は其刹那に於て久遠の基督を見たりし者。而して見るは信するの始め、信するは救はるゝの始めなるが故に、耶蘇はエリコを出づる途すがら盲者の眼を啓いて自らを直視せしめ給ひたり。靈の盲者も亦必ず如是の奇蹟に逢ふべし。眼を啓け、見よ神の國

はこゝに在り、耶蘇其人是れ也。久遠の基督とは、即ち神の國としての耶蘇其人に外ならず、靈の眼を以て之を見見て而して之を信する者は必ず救はるべし。救はるとは久遠眞實の生命を自得して、神と偕に生き、神に在りて生き、神の如く生き、神として生きるの謂ひ也。是れ實に神國の奧義にして、耶蘇其人は此の奧義を色身に開顯し、その品性と事業とを以て萬民の前に之を實證したるが故に、彼は即ち神國なり、彼は即ち福音なりといふの一見奇怪なるが如くして、實は萬古の眞理なるを知るべし。この眞理の窄き門、即ち耶蘇其人に對する信仰の一念より入りて、神國の奧義に達するの靈的生活こそは、實に基督教の本質なり。而して此門戸を離れては終に堂奥を窺ふ能はず、又此堂奥に達せずしては門戸の眞相を解する能はざるが故に、兩者は本來相即不離と謂ふべく、耶蘇の人格は即ち神國の極致、神國の極致は即ち耶蘇の人格

なり。此一體觀の中に始めて久遠の基督現はる。久遠の基督とは神國の極致たる耶蘇の人格を指す者なれば也。久遠の基督を信じて、その生命をわが生命とし、神と偕に生き、神に在りて生き、神の如く生き、神として生きるは、實に福音の奧義にして、耶蘇は此の奧義を色身に啓示したる古今東西唯一にして無二なる超越的人格なり。彼を信するは即ち神を信するなり、神に従ふは即ち彼に従ふ也、彼と神とは一體なれば、吾等も彼を信じ、彼に聽きて、神に近き神と親しみ、之と一つなるを理想とす。是れ實に三福音書に傳へられたるナザレの耶蘇が齎し、福音の極致にして、同時に約翰福音書、若くは保羅の書翰、若くは世々國々の聖徒信者が尊奉したりし基督教の根本精髓なりとす。

耶蘇を信するは神を信するなりてふ思想は、耶蘇自身の説教の中に明かに其根拠を有す。後章に之を詳述せんが、爾等を接くる者は我

を接くるなり、我を接くる者は我を遣し、者を接くるなり」馬太十一〇四十の句に徴せよ。神に従ふは耶蘇に従ふなりてふ思想も亦然り、神の道を聴きて之を行ふ者は即ち我母わが兄弟なり」路八〇廿一の句に徴せよ。神と耶蘇とは一體なりてふ思想は、決して後世の發見にあらず、一見約翰福音書の如く明々白々ならざるの觀はありしも、三福音書中に既にその萌芽の顯著なるを見る。宜なるかなエルサレムの學者とパリサイ人とが耶蘇を訴へて「神と己れとを齊うるの瀆神罪に問ひし」と云ふ事や。吾等が神と一つなるの窮竟理想も、亦耶蘇が自ら説示し給ふ所にして、天國は爾等の所有なるべし」と云ひ、天に在す爾曹の父の完きが如く爾等も完かるべし」といふ如き、今古を曠うする大宣言大教訓は、耶蘇其人にして、始めて道破し得べき所のものなり。

第四章 三福音書に現はれたる 神國思想

予は天國の奧義を示して、神的生活に在りと言へり。而して耶蘇其人こそは色身を以て此奧義を示せる活ける神の國なりと説きぬ。是れ三福音書を貫通する神の國の説教を綜合し來りて、當然歸着すべき結論なるも、典據を示すに非れば、人或は以て獨斷臆説に過ぎすと爲さん。さらば多少の煩雜を忍んで之を論證せざるべからず。三福音書に現はれたる神の國の教は、前後矛盾すと稱せらる。而かも神の國の本義を予が上來說破したる如く解釋せんか、恐くは曩きに前後矛盾の觀ありし章句も、その根底に於て渾然融會する所あるを直ちに看取し得べし。

一、耶蘇は猶太思想を超越す

耶蘇の精神は終始一貫す。只福音書の記者と、耶蘇より教を受け、若くは之を傳へ聴きたる人々とが、不知不識、時代的民族的の思想信仰を其中に混融せしめたる爲めに、聊か前後矛盾の觀を呈するに至りたる而已。されど濁水の中に在りても名玉は自ら燦然たり、耶蘇の根本精神は、時代思想と民族信仰に掩はれながらも、光彩素より陸離たり、苟くも聖書を讀む者は總ての殘滓を棄て、直ちに精粹を捉ふるの覺悟なかるべからず。こゝに殘滓濁水と形容する者は、ユダヤ當時の末世思想是れ也。即ちユダヤ人の所謂神の國とは、神がイスラエル民族をして再び地上の覇者たらしめ、總ての異邦人を廢懲する政治的王國の謂ひなりき。彼等は惡魔の支配する此世の終末は目睫の間に迫まれりと

信じ、之に代りて來る可き神の支配の世を翹望したりき。而してその世の來らむ日は、即ち最後審判の日にして、神はイスラエルの敵を滅し、且つ同時に惡魔の勢力を總て勦絶し盡すべしとは、彼等が火の如き熱情を以て待ち設けたる所なりき。耶蘇も確かに時代の子として、その日の來るを豫想したりしならん。耶蘇が天國の教の中より、此種の末世的戲曲的分子を悉く除去し去らんとするは、恐くは聖書に忠なる者にあらず。如何に極端なる高等批評家も猶ほ抹殺し得ざる末日審判の豫言と譬喩との少くとも三四は殘るなるべし。

されど同時に吾等は知らざる可からず。耶蘇の天來的獨創力は、神の國の思想に於ても、極めて明に顯彰せられたり。彼が傳道の第一聲として、神の國は近けりと宣言したる、その所謂神の國は、ユダヤ思想より

脱化したるは疑なきも、その根本精髓に於ては、全く斬新なる意義のものなりき。彼の傳ふる神の國は、純粹無雜なる神の支配にして、毫も政治的國民的色彩を帯ばざりしなり。彼は荒野の試練に於て、既に業に是の如き時代思想を全然脱却し得たるなりき(路加四〇五―八)。彼の傳ふる神の國は、異邦人を滅す者にあらずして、之を救ふ所の力なりき。耶蘇を受けざるサマリヤ人を怒りて、弟子のヤコブ、ヨハナが「主よ我儕エリヤの行せし如く、天より火を召降し、彼等を滅さん」とす可きか」と問へる時、耶蘇は答へて曰ふ、「人の子は人の命を滅す爲めに來らず、惟之を救ふ爲めなり」と(路加九〇五―五六)。彼の傳ふる神の國は、イスラエルの民なるが故に入るを得べしと謂ふが如き者にあらず。耶蘇の言に聽かざる者はイスラエル人と雖長へに入る能はず、耶蘇の言に聽く者は異邦人と雖容易に入るを得るなり。故に彼はエルサレムに

行く途すがらユダヤ人に警告して曰く、「爾曹アブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者は神の國に在りて、爾曹は外に投出さるゝを見ん時に、哀哭切齒することある可し、また人々西や東北や南より來りて神の國に座するならん、夫れ後の者は先に先の者は後に爲るべし」と(路加十三〇廿二―卅)。豈にイスラエルの民とのみ言はんや、彼の傳ふる神の國は、彼が父母兄弟なるの故を以てしても、決して入り得る者にはあざざるなり。彼は言へり、「わが母わが兄弟は誰ぞや、夫れ神の旨に従ふ者は是れわが兄弟わが姉妹わが母なり」(馬可三〇卅一―卅五)。或る時群衆の中より婦人ありて叫んで曰く、「爾を孕みし腹と爾の吮ひし乳は福なり」と、耶蘇の咄嗟に應へ給へる一語は、彼が救の面目を眼前に躍如たらしむるなりき。曰く「されど神の道を聽きて其を守る者の福なるに若かず」と(路加十一〇廿七―廿八)。げにも血肉は神の國を嗣ぐ能はず

と保羅の言へるは、全く耶蘇の精神を正當に理解したる者なり。而して耶蘇は是等の點に於てユダヤ思想を脱離したるのみならず、末日の審判に關しても、國民的偏頗心を全く超越し去つて、純乎たる道德的意義を一層深く且つ強うしたり。耶蘇がユダヤ思想を繼承したるは、只形骸の上に止り、その根本精神に至つては、全く彼が神秘なる意識の奥より流露し來れる新しき生命にてありき。——而かも親しく彼に接觸して絶えず教を聽きたる多くの弟子達が、果して形骸と精神とを明かに區別し得たりしや。假令耶蘇の創見を見失ふには至らずとも、その時代思潮と交渉を有する微妙の點に關しては、彼と此とを雜然混淆するの嫌なかりしや。特に三福音書の編著せられし頃は、既に幾多のテボカリブニス(新約聖書の最後に置かるゝ約翰黙示録の如き一種の宗教的空想の產物にして、主に末世の光景を描けり)が人心を感動

せしめたる當時なりしを以て、三福音書の記者が、幾許かの資料を是等の小黙示録に得たりとするは、當然の推想にして、且つ事實の徴す可き者ありとせば、聖書に現はれたる神國の思想に、一見矛盾の章句あるも蓋し故なしと謂ふ可からず。されば三福音書の記事の中より、純粹なる耶蘇の精神を求めんと欲せば、須らくユダヤ的彩色を離れたる神國の精髓に徹底するを要とす。福なるかな二十世紀の吾等は、斯の如き自由の心を開いて聖書に對するを得るが故に、一千九百年前の昔、親しく耶蘇に聽ける或種の人々にも優りて、其新しき精神を在るが儘に味ひ識るを得るなり。さらば聖書に現はれたる神國思想の矛盾は、如何にして之を融會し得べきか。予は今こゝに高等批評家の造詣に學ばんとする者にあらず、是れ素より有益の業なるも、本書の目的とする所にあらざれば也。予は只自己の悟得に即して速かに結論を語らん

と欲す。

二、神の國は既に現はれたりこの思想

否、結論は予が既に業に語れる處なり。神の國を三世一貫の靈的生命と見る、耶蘇の眞意のこゝに在ること即ち是れ也。耶蘇は或時自己の活動と共に又活動の中に神の國の既に顯はれたるを宣言したり。曰く、若しわれ神の靈によりて鬼を逐ひ出し、ならば、神の國は最早爾曹に至れり〔馬太十二〇廿八。路十一〇廿參照〕。神の心の實現、即ち是れ神の國なりてふ思想は、ユダヤ思想より脱化し來りて其精粹を發揮したる耶蘇が神國觀の骨髓なり。而かも此思想を推究し行かば、神の心の實現は、全く耶蘇の活動に俟ち、耶蘇の活動は、耶蘇の人格に依る。故に此一語の中には、明かに耶蘇の人格即ち是れ神國の骨髓なりてふ

根本福音を合著すと見るべし。ヨハネが人を遣して「來るべき者は爾なるか亦われら他に俟つべきか」を耶蘇に問はしめし時、耶蘇は聲明して宣く、爾曹が見るところ聞くところをヨハネに往きて告げよ、夫れ替は見跋者は行み、癩者は潔り、聾者は聴き、死にし者は復活され、貧しき者は福音を聞かせらる、凡そ我爲に賤かざる者は福なり〔路七〇廿二—廿三〕と。來る可き者即ちメシヤは神の國の王者なり、耶蘇の答ふる如くんば、現に見るところの耶蘇の行動事蹟と、現に聞くところの耶蘇の言説教訓とは、即ち神の國の表徴なり、否、神の國の顯現なり。而して如是の驚くべき言行は、全く耶蘇の人格より流露し來る者とせば、耶蘇の人格即ち神の國の發現なりと見るの當然なるを悟了し得可し。耶蘇は實に斯く自ら聲明し、且つ「わが爲めに賤かざる者は福なり」てふ適切な警句を加へて、楔を強く人の心に打ち込みたり。即ち知るべし耶蘇

即神國の消息は、又此中にも含蓄せらるゝを。

三、神の國は未來に現はるべし この思想

神國顯在の思想と一見全く相反するは、神國が豫知す可からざる未來に於て、忽然出現すべしとの思想是れ也。此二つの思想を融和するは、到底牽強附會に過ぎざるやを豫想せしむる者ありと雖、實は決して然るに非ず。否、寧ろ此二つの思想は兩々相俟ちて始めて徹底的に了解せらる可き者なり。試に少しく其理由を語らむ歟。神國の到來を未來に在りと見たる思想の中にも自ら二様の趣向あり。一は義人の光榮を享くる歡樂の日にして、他の一は地獄の火を以て惡魔の族を燒かんとする審判の日なり。共に是れ神の支配の半面を言ひ現はす者な

れども、審判の日は戲曲的光景に富み、歡樂の日は寧ろ極めて平和なり。この兩者の對照は興味淺からざるも、今は先づ聖書に描かれたる未來的神國觀を如何に解釋す可きやに就て、一般的見解を求めんと欲す。受難の前夜聖晚餐の席上に於て、耶蘇はパンを擘き葡萄酒を分ちて、弟子と共に之を飲み且つ食ひぬ。耶蘇が當夜の心事は予が今こゝに追憶せんとする處にあらず、予は只彼が眼底に耀きし光榮の未來を推想せんとするのみ。彼れ食卓に臨んで宜く、之を神の國に成るまでは復た之を食せじ、又杯を取り謝して宜く、神の國の來るまでは葡萄より造りしものを飲まじ、路廿二〇十四―廿。太廿六章。可十四章。是等の聖語を文字の儘に解釋すれば、耶蘇は確かに此地上に於て再びパンを擘き葡萄酒を飲むの日あるを豫想し給へる者に似たり。特に耶蘇は大なる希望を弟子達に與へて曰く、わが患難に於て我と偕に居りし者

は爾曹なり、我父の我に任せし如く、我も爾曹に國を任すべし、是れ爾曹わが國に於て我案に飲食し且つ位に座してイヌサエルの十二の支派を稱かんが爲めなり〔路廿二〇卅〕。耶蘇は今現に弟子達と食卓を共にしつゝある也、而して彼等に約するに、他日復たわが國に於て我案に飲食すべきを以てす、その國を地上的現實的のものと解するは自然に近しと謂ふべし。耶蘇は又或る時弟子達に曰ひけるは、それ人の子は父の榮光を以て其使等と偕に來らん其時各々の行に由りて報ゆべし、誠に爾曹に告げん人の子その國を以て來るを見るまでは、此に立つ者の中に死なざる者あるべし〔馬太十六〇廿七—廿八〕と。此聖語を讀めば、その地上的現實的なる王國が、近き未來に於て顯はるべしとは耶蘇が確信より迷り出でたる偉大なる約束とも見るべし。然らば吾等は之を以て疑もなく耶蘇の根本精神なりと斷言して可なるべきか。曰く、

否。若し斯く斷言し得可くんば、耶蘇の宣傳したる神の國の福音は、首尾一貫せざる支離滅裂の宣言となり、且つは一千九百年の歴史を以てしても猶ほ實現せられざる一場の幻夢に過ぎざる事ならん。げにも耶蘇は地を離れては天を説かず、此世に即せずしては彼世を説かず、人の精神を外にしては神の支配を説かざりき。即ち彼が宣べたる神の國は人の色身に體現し得べき心靈の王國にてありき。此消息を明かに悟了して、而して後ち改めて耶蘇の未來的神國觀を聽け。神の國の來るまでは飲まじと言ひし葡萄酒の酒は、杯に汲みて口より入るべき葡萄酒の酒にては非るなり。試みに馬太傳廿六章廿九節を見よ、われ爾曹に告げん、今より後爾等と共に新しき物を我が父の國に飲まん日までは、再び葡萄酒にて造れる物を飲まじと〔馬可十四〇廿五參照〕。來るべき父の國にて飲まんとする葡萄酒の酒は、全く新しき物なるを注意せよ。

食卓を同じうせる弟子達は此一句に悟入する能はざりき。されど是れ全く靈的意義に解して始めて耶蘇の言の眞實なるを知る可き者なり。路加傳廿二章卅節の聖約も亦然り。「我が案に飲食し且つ我が位に座してイスラエルの十二の支派を鞠かん爲め」耶蘇の宣へるは、靈的意義に解してのみ始めて前後矛盾なき徹底の思想に觸着し得べし。即ち此句の前に於て「我父の我に任せし如く、我も爾曹に國を任すべし」とは、是れ豈に目に見ゆる飲食の國の謂ひならんや。疑もなく是れ靈的生命の王國を指す者なり。我が案に飲食すとは、神の道を糧とするの義にして、位に座すとは神より與へられたる心靈の權威に立脚するの義なり、十二の支派を鞠かしめんとは彼等を裁判官たらしむるの謂ひにあらず、執政者たらしむるの意にもあらず、全く善惡正邪を示すべき宗教道德上の規矩準繩たらしむると同時に正善を勵し邪惡を滅す

る地の鹽世の光たらしむるの義なり。不幸にして十二の弟子達すらも直ちに此根本義を悟了し得ざるが如くなりき。蓋し耶蘇をして此語を放つに至らしめたるは、全く彼等が心味くして、神の國の本義を知らず、吾等の中その國に於て長たる者は誰かなど互に諍論したる程なりければ也。而かも今の世の信徒たらん者は須らく心の眼を開いて、文字の蔭に隠れたる心靈の聲を聴かざる可からず。例へば曩に言及したる馬太傳十六章廿七—廿八節の聖句の意義に就ても亦斯の如し。「夫れ人の子は父の榮光を以て其使等と偕に來らん」といひ、人の子その國を以て來るといふが如き章句を文字通りに承認せんとするは、耶蘇に忠なる所以にあらず。吾等の聖書を讀むや、神を拜すると一様に、只靈と眞とを以てすべし。予は今、人の子の何を意味するやに就て學究の説を求めざるべし。こゝには直ちに耶蘇自らを指し給ふ者と信じ

て素より不可なるを見ざるなり。而かも當に死なんとする耶蘇が再び「その國を以て來るといふは如何の意ぞ。彼は曩に神の國は爾曹に來れり」と宣言したりしに非ずや。今に至りて「父の榮光を以て其使等と偕に來らん」といふは前言を抹殺する者に非ずや。是れ確かに矛盾なるべし、而して實は矛盾に非るなり。何の故に之を謂ふか。曰く既に幾度か説破したるが如く、神の國は耶蘇の生命其者なり、耶蘇の活動と共に神の國は素より顯はれたるなり。而して耶蘇の生命は、假令意識の透徹を缺くとも、既に弟子達の享けし所なり、されば神の國は最早地上に生長し始めたるなり。耶蘇が受難の前夜に於て「我父の我に任せし如く、我も亦爾曹に國を任すべし」といひしは、自ら彼等を立て、神の國の繼嗣者と爲し給へるなり。而かも奸惡暗昧なる此世の人々は、彼を受けずして却つて彼を殺さんと圖りつゝあるなり、且つその托し

て神の國を嗣がしめんとする弟子達すらも、信念極めて弱く、智慧も亦淺し。十二使徒中第一の長者にして磐石の稱あるペテロ其人すら、耶蘇の眼には明かに「鷄鳴かざる前に三次我を識らす」と言ふを豫知し得たるなり。さらば耶蘇の此世に傳へんと欲する靈的生命は、當に是れ悽風吹き起りて、燈火明滅たるの狀態に非ずや。人一人たびゲッセマテに於ける耶蘇が血涙の祈りを讀み、而して昏然微睡せる弟子達の姿を顧みば、實に切初以來未曾有の莊嚴悲愴なる光景を眼頭に髣髴し來るべき也。素より耶蘇が如是の感懷を催し始めたるは、橄欖山の夜にもあらず、聖晚餐の夕にもあらず、恐くはエルサレム入城の後、死の運命の終に免れ得ざるを自覺したる刹那にてやあらん。而かも耶蘇は此大危機に際會しても、神意の必ず此世に成るを確信して疑ふ所なかりき。此世は今我を受けざれど、我が生命は滅びず神の道は長しへに生くる

が故に、後ち終には我と我弟子とを受けて、無上の尊信を拂ふに至らんとは、彼が死を豫期したる以後に於て、一層強烈に信じて待ち望める所なるべし。「夫れ人の子は父の榮光を以て其使等と偕に來らんとは此確信と待望との莊美なる言ひ現はしに外ならず。「人の子その國を以て來るといふも亦之と全く同義なり。耶蘇は斯く信じ斯く望みぬ、而して歴史は亦明かに之を實證し得たり、即ち耶蘇が十字架上の死は彼が失敗にあらずして實はその成功の表標なりき。彼れ磔殺せられて後ち數日、彼の精神は此世に復活したり。總ての弟子達は失望の淵より起ちて、天軍の一夜に降れる如く、強き靈的王國の基礎を十字架の下に建設したり。げにも新興の教會、然り其靈的生命は、確かに新しきエルサレムなりき、耶蘇の血と肉となりき、然り久遠の基督はこゝに在りき、活ける神の國はこゝに在りき。茲に至りて即ち知るべし、神の國は

既に顯はれたり。而かも既に顯はれし所にも優りて、榮光を認めらるゝ日來らん、今顯はるゝ所は人視て之を知らず、後ち大に知らるゝ時あらん、而して其日決して遠からずとは、耶蘇の根本精神なるを。又知る可し、耶蘇の人格は神國の骨髓なるが故に、色身の耶蘇は滅ぶとも、人格の生命即ち久遠の基督は、長しへに進化發展して一日も止む時無かるべく、従つて神國は既に顯はるといへども、實は同時に大なる未來を有する者なるを。耶蘇は神國の教に於て決して矛盾を犯し給はざりき。一見矛盾なるが如き兩端の思想は、其根本に溯れば、兩端の孰れよりも偉大なる思想、即ち神國は三世一貫の靈的生命にして、耶蘇より前に存し、耶蘇の中に現はれ、耶蘇の後に愈々益々成長發達す可き者なりてふ、永遠の眞理を啓示する者なりき。

四、兩思想の根本的一致

此故に耶蘇の説教に現はれたる未來の神の國を正當に理解せんと欲せば、宜しく時間の考量を棄て、只端的に其永遠なる意義を捉ふ可きなり。換言すれば未來に現はるべしてふ神の國を、長しへに現在する事實として承認するを要するなり。例へば、世改まり人の子榮光の位に座する時とは、必ずしも十年二十年若くは二百年三百年の後に、斯の如き時來るべしとの意にはあらず、吾等の心全く新しくなりて、榮光を基督に歸するの時、その時こそは今夜にもあれ明日にもあれ、即ち是人の子榮光の位に座して吾等の心に臨む時なり。斯の如き悔改といひ回心といふ所の者は、師も知らず親も知らず自らさへも知らざるに、突如として人心を震ふ無からず。耶蘇が譬喩に於て又教訓に於て、神

の國の來る如何の時なるを知らず、之を知るものは只天に在す父あるのみと言へるは、當に此種 of 消息を傳ふる者ならん。個人に於ては然り。只國家社會若しくは人類全體としては果して如何かある可き。革命レボリユーションは十八世紀末の標語なりき、而かも十九世紀の中葉以後は、之に代ふるに進化エボリユーションの旗旛を以てせりと、學徒の好んで告ぐる所なり。而かも進化とは本來何事ぞ、永遠の時より見れば、百年も實に一瞬に過ぎず、革命の短き時間に於ける進化なるが如く、進化は長き時間に於ける革命のみ、時の長短は畢竟程度の問題とも謂ひ難きにあらず。況して人文進化の一切は、多く天才の力に俟ち、天才は人類能力の革命なるに於てをや。人類全體は別としても、一の國家一の社會に在りて、意外にも精神革命の突如として起らずとは謂ふ可からず。是れ歴史上屢々見る所の事蹟なればなり。耶蘇が「人の子の權威と大なる榮光とをも

て天の雲に乗り來るを見んとは、恐くばかゝる時世の光景を思ひ浮べ
て詩的に言ひ現されたりし者乎。遮莫此句のみならず總じて馬太傳
二十四章三一三十一節に描かるゝが如き、人の子の來らんとする末日
の豫言は、耶蘇の言語に共通なる單純簡樸の調子を缺き、餘りに富麗豐
麗なる色彩に粧はれたるを覺ゆ。恐らくは福音書の記者、若くは傳説
資料の供給者が、不知不識當時のアポカリプシスによりて影響を受け、
爲めに耶蘇の言説を修飾するに至りしこと既述の如き者ありしなら
ん。吾等は言葉其儘を信するの痴態を脱して、その中に含蓄せる根本
の精神を明に悟了するを要す。即ち耶蘇が神の國の實現を熱望し、且
其の到來を確信したるが故に、將來必ず神の支配の全地に普く、義人の
墓より甦りて、光榮を享くるの日あるべきを、既に願はれたる事實の如
くに疑はずして語れる心事に對して充分の洞察無かる可からず。こ

こに吾等の學ぶ可き者は先づ第一に耶蘇の確信なり、されど耶蘇は斯
の如き確信を有したりきと言ふのみにては、素より何の益する所かあ
る可き。耶蘇の確信を吾等が確信として始めて生命相觸るゝの活消
息に入るを得べし。此活消息に入りたらんには、吾等自ら奮つて神の
支配を此世に齎すべき運動の先驅となり、義人を墓より甦らしめ、悪魔
を地獄に投ずるの健闘を試む可きに非ずや。吾等若し一代にして此
事成らずんば信心相觸し道念相傳へて永遠の未來に及ばん。假令肉
は朽つるとも靈は活くるが故に、此事必ず成るの日あるべしとは、吾等
自らの覺悟ならざる可からず。耶蘇が末日思想の根本は、畢竟是の如
からんのみ、この精神を外にしては、幾多靈妙の形容句も無意味の修辭
に墮し終らん。斯くして聖書に現はれたる末世思想は、吾等が日常の
生活と極めて親密なる交渉を結び來るべく、末日を現在に感じつゝ、即

ち永遠を眼頭に望みつゝ、健闘し悦樂し感謝するの妙境をこゝに了悟し得べきなり。

五、審判の日は何ぞや

然らば末日とは何を意味する乎。末日は要するに審判の日なり。審判の日とは何ぞ。聖書の記事に依れば、其日は開闢以來の患難の日なり、その日には孕める者と乳を哺ます婦は禍なる哉。其日は天地變動の日なり、患難の後日は暗く月は光を失ひ、天の星は落ち天の勢ひ震ふべし。其日は基督再臨の日也、其時人々は人の子の大なる權威と榮光を以て雲の中に現はれ来るを見ん。再臨の基督は何事をか爲さんとする。彼は萬國の民をその前に集め、羊を牧ふ者の綿羊と山羊とを別つが如く彼等を別ち、綿羊をその右に置き、山羊をその左に置き、彼に與

ふるに國を以てし、此をば燃えざる火に入れむとするなり。即ち「惡しき者は窮りなき刑罰に入り、義しき者は窮りなき生命に入る」。末日審判の大業は是れ。此の思想の何處より來れるかは、既に業に之を説きぬ。そは全くユダヤ思想の耶蘇によりて醇化せられし者なり。而かも耶蘇の醇化したるは、單に民族的政治的なりしものを、普遍的道德的ならしめたりと云ふには止らざるなり。彼は之と同時に、ユダヤ人が時間的に計算して、頻に焦慮しつゝありし末日の到來をば、全く超時間的に考へたりき、是れ極めて重要な耶蘇の創見とす。彼の信念より云へば、末日審判は、何れの時この事あるやと人に尋ぬ可き性質の問題に非る也。弟子達は之を知らんとして心を盡したるが如くなりしも、耶蘇は何等明白なる答解を與へ給はざりき。聖書の記者は、此質問に對する耶蘇の返答を記して、答へて彼等に曰ひけるは「胃頭に置きな

がらも、その語る處は毫も質問の要點に觸れざりき。(馬太廿四章三—
五一。馬可十三章一—卅七。路加廿一章五—卅六。質問の要點に觸
れざるにあらず、質問其者が全く末日問題の要點に觸れざりしなり。
故に一見答解を爲さざるが如き耶蘇の答解こそ、實は末日問題の眞髓
に觸れたる者なりき。而かも弟子達は猶ほ能く之を悟らず、福音書記
者亦思想の混雜を免れずして、傳ふる所純粹ならざるも、その精神は明
かに之を讀み得べし。即ち耶蘇の所謂末日は、何れの時來るべしと言
ふ者にはあらず、そは常に在り、現に來りつゝある者なれば也。然り、審
判は耶蘇の出現と共に始れる者にして、末日とは其完成を意味す。而
して是れ人類の心靈に於て實驗すべき內的證悟也。耶蘇が末日審判
の思想は、茲に不滅の眞髓を有す。若し聖書の文字に拘泥して、末日の
審判を俟つに非ずんば、義人も終に窮りなき生命に入るを得すと速断

せば、耶蘇の説教の大半は其力を失ひ終るべし。「我誠を守らば窮りな
く生くべし」とは耶蘇が約束の本義にあらずや。「神の道を聽きて之を
行ふ者は天國に入るべし」とは彼が不斷の教訓にあらずや。若し此種
の約束と教訓とが單なる未來の希望に止らば、救ひは現在の恩恵にあ
らずして、永遠の宿題たるに終らん。而かも耶蘇は常に断然として、「爾
の信爾を救へり、人の子地にて罪を赦すの權あるを知らしめん」と宣言
し給へるなり。貧者に施せば天に於て財あらんと教訓し給へる時、一
杯の水を飲ませなば、天に於て報あらんと明言し給へる時、否、何處如
何なる場合に於ても、耶蘇は常に神の國の現に存在するを開顯し給へ
るなり。即ち知るべし末日の審判とは、本來目に見ゆる世界の震動を
意味するにあらずして、寧ろ心靈の不安、盪搖、煩悶を意味し、肉に感ずる
患難を意味するに非ずして、寧ろ靈に感ずる苦痛を意味し、耶蘇が雲に

乗りて来るを意味するに非ずして、基督の姿が心眼に映じ来るの消息を意味することを。此意味に於ける末日の審判は、世々國々に於ける聖者信徒の屢々經驗せる處、眞の悔改は恐く良心の奥底に於て、此の末日の審判を深酷に味へる結果たるべし。且つ心靈の眼鈍くして一生涯を無頓着に送りし人々も、誰か幽明を異にせんとする死の一轉瞬に於て、此の審判に遭遇せざるを保せんや。是れ今の世の人の全く閑却する所なるも、深奥なる疑問は此中に存するを思ふべき也。試に耶蘇の譬喩を聽け。「或る富める人その田畑よく豊^みりければ、自ら付ひ言ひけるは、我が作物を藏むる所なきを如何せん、又曰ひけるは我かく爲さん、我倉を毀ち更に大なるを建て、總て我が作物と貨をそこに藏むべし、斯くて靈魂に對ひ、靈魂よ多年を過す程の許多の貨物を有ちたれば、安んじて食ひ飲み樂めよと言はんとす、然るに神之に曰ひけるは無知な

る者よ今夜爾が靈魂とらるゝこと有るべし、然らば爾の備へし物は誰が有になる乎、凡そ己の爲めに財を蓄へ神に就て富まざる者は此の如きなり、路加十二〇十六—廿一と。思ふに此世の人の最大多數は、此の譬の中なる富める人より一步も遜んずること能はざるなり、彼等は貨財を以て足れりとし、飲食を以て樂みとす、而かもその靈魂の今夜にも取らるゝを知らざるなり。本來此譬の眼目は、凡そ己の爲に財を蓄へ神に就て富まざる者は禍なりてふ最後の一句、即ち只先づ神の國を求めよの精神に存するも、無知なる者よ今夜爾が靈魂取らるゝこと有るべしてふ恐るべき警告は神に就て貧しき者の宜しく味ふべき一大事なりとす。耶蘇は始めより不滅の生命の萬物に遍滿するを信じたるが故に、所謂無常觀の爲めに悲哀を感ずる事なかりしも、此不滅の生命に入らざる、即ち神に就て貧しき人々の生活を深く憐みて、こゝに忘れ

られたる一大事を明かに説破し給ひしなり。吾等が靈魂の取らるゝ時、その時は是れ末日なり。その時に及んで泣くも悔ゆるも哀哭切齒するも、最早審判の苦痛を脱し得べきに非るなり。末日の後は吾等之を知らず、之を知るものは只神あるのみ。されど末日其者は斯くして吾等の知り得べく且つ逢はざるを得ざるべき眼頭の運命にてある也。是れ予が末日の常に在り現に來りつゝあるを説ける所以にして、耶蘇の眞意も確かに此處に存せし而已ならず、彼れ自身はその靈的權威を以て、永しへに末日の審判を人心に與へつゝある者なり。「その日人の子は權威と光榮とを以て現はれ來らん」とは蓋し此消息を傳ふる者なり。茲に至りて耶蘇は即ち神の國なりてふ思想と、神の國が末日の審判を以て現はるてふ思想との、根本的に融合歸一する所以を明かに洞察し得べきなり。

耶蘇は譬喩譚の作家として、實に萬古の天才なりき。末日の審判に關しても、吾等は譬喩に學ぶ所多し。エルサレム神殿附近に於ける耶蘇が末日の豫言には、少からず默示録的の異香を雜ふれども、譬喩は素樸にして清新なる眞理を却つて明白に發露するが如し。讀者先づ第一にその純乎として道德的なるを見よ、而して第二にその極めて靈的なるを見よ。「天國は人畑に美種を播くに似たり」との喩（馬太十三〇廿四―卅）。此喩の秘義を耶蘇自ら解き給ふ、同卅六―四十二。曰く美種を播く者は人の子なり、畑は此世界なり、美種は是れ天國の諸子なり、稗子は惡魔の子類なり、之を播く敵は惡魔なり、收穫は世の末なり、刈者は天の使等なりと。その時歛めて爐の火に投げ入れらるゝ者は、凡そ躓礙となる者また惡を爲す人にして、その時父の國に於て日の如く輝かんものは全く義しき人なりとす。こゝに

所謂末日は猶ほ時間の觀念を脱せざれど、其道德的靈的含蓄を推究すれば、是れ人類精神の普遍的恒存的實驗なるを想はしめずんばあらず。又天國は海に投ちて各様の魚を取る網の如しといふ喩も歸趣全く之と同じ。(馬太十三〇四十七十五)。何故に末日の觀念が終に時間を超越する現在の歸趣を有するかといふに、耶蘇の言明かに之を啓示する者あれば也。蓋し耶蘇は世の終りの必ず來るべきを豫言し給へると同時に、其日其時を知る者は、惟わが父のみなり、天に在る使者も子も誰も知る者なしと宣言し、更に進んで、此日何れの時來るか知らざれば、爾曹慎しみて目を醒し祈禱せよ(馬可十三〇卅三)。と警告したり。既に世の終りの何時來る可きかを知らず、之が爲めに不斷の準備を要すとせば、世の終りは將に來らんとす、否、世の終りは既に來りつゝあり、否、否、世の終りは常に眼頭に在り、爾等の

心眠れる時は即ち其時なりといふ超時間的、純精神的の意趣が、自ら末日觀念の中に含蓄せらるゝと爲すも、決して過言にあらざるべし。耶蘇が「夫れ人の子は遠行せん」として其權を僕等に委ね、各に爲す可き事を任せ、又闇者に怠らす守れと命じて家を去る人の如し(馬可十三〇卅四—卅七)と説き給へる譬喩の本意も全く之に外ならざるなり。

六、歡樂の日は何ぞや

末日の審判に縁ある多くの譬喩の中に在りて、天國は燈を執りて新郎を迎に出づる十人の童女に比ふべし(馬太廿五〇—卅三)とふ美しき物語を見よ。「其中の五人は智く五人は愚なり、愚なる者は其燈を取るに油を携へざりしが、智き者は其燈と共に油を器に携へたり、智愚の分

る、所は油を携ふると否とに在り、油を携ふとは何ぞや靈性の涵養是れ也。靈性の涵養を怠らざる者にとりては、末日素より恐るゝに足らず、是れ刑罰の日にあらず、窮りなき生命に入るの日なれば也。愚かなる童女らが油を買はんとて出で往きし時、新郎來り、既に備へたる者は之と偕に婚筵に入りしかば門は閉ぢられたり、門の閉ぢたる後に來りて「主よ主よ我儕の爲めに開きたまへ」と叫ぶも、時の既に遲きを如何せん、耶蘇即ち警告して曰く、「然れば怠らすして守れ爾等その日その時を知らざれば也」と。審判は何れの日來る可きかを知らず、否、何れの日として來らすといふ事なし。燈を執りて油を忘れたる者は禍なるかな、其童女等は新郎の怒る所となりて、永しへに靈界の門外に彷徨せざるを得ざれば也。燈を執りて油を忘れざりし者は福なるかな、其童女等は新郎の喜ぶ所となり、且つ之と偕に婚筵に入るの歡樂を享く可ければ也。

ば也。想ふに耶蘇は此譬喩に依りて、末日の現在を暗示し給ふと同時に、所謂審判なる者は、畢竟日常生活に於ける人心の態度如何に存するを教訓し給へるならん。——されど此譬喩の背後には猶ほ隠れたる一大秘義の伏在するを知らざる可からず。即ち智き童女と愚かなる童女とを劃然相隔たしめたる門こそは、是れ正しく神の審判を意味す。而かも此審判の「門」の奥には、婚筵あるを忘る可からず。此の婚筵こそは天の使たちの居る所なり。義人の顔の日の如く輝く所なり。人の子榮光の位に座する所なり。アブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者聖徒たちの在る所なり。人々西や東北や南より來りて座する所なり。然り是れ實に第宅^{すまひ}多き父の家にして、新郎を愛する者の彼と偕に在る所なり。嗚呼、この國を今何ぞか謂はん、この國は地上を離れて存するにあらず、恐くは人生に即して實在する者ならんも、又同時に地

と人ごを絶したる超越境と言はざるを得ず。げにも是れ目に見えず色に現はれざる久遠眞實の世界、心靈の王國、天上の神の國也。耶蘇の祈り給ふとき、此天上の神の國は絶えず眼頭に鮮かなりしならむ。耶蘇の教へ給ふとき、此天上の神の國は常にその背後に耀きしなり。耶蘇は哲學者又は神秘家と異り、天上永遠の國を靜的に將た抽象的に觀照して、之に歸入せよとは説き給はず、生ける人間の心に即して動的に且つ具體的に之を垂示せんと試み給ひたるも、地上に建てらるべき神の國は、謂ふまでもなく天上に備れる神の國の顯現にして又其完成なりき。「御心の天に成るが如く地にも成らせ給へ」とは即ち是れなり。主の隣りの中に在る此の一句は、假令高等批評家によりて歴史的價値を失ふとも、恐らくは耶蘇の意識に照して、永しへに其精神的價値を失はざるべし。耶蘇の道德は、最も純粹且高尚なる意味に於て、報償主義

の倫理なりとも謂ふ可かりき。彼は人々を教ふるに、必ず約束を以てしたり。曰く、天に於て酬ひあらん。曰く、天に於て財あらん。曰く、天に於て大なる者と呼ばれん。曰く、天にその名の録さるゝを歡べよ。耶蘇は地上の何物をも永遠不滅の價値ありとは誨へ給はざりしかど、天上の最と微き者も、地上の最と大なる者に勝りて、榮光と權威とを有すと爲しぬ。げにも耶蘇は天上の國の福音を此世に齎したる人なりき。天上の國即ち是れ神の國なり、父なる神の支配し給ふ國なり、然り心靈の王國なり。こゝに無窮の生命あり、こゝに不朽の歡樂あり。末日の審判は、審判其者を以て終局を告ぐるにはあらずして、更に輝ける堂奥を有す。其堂奥は即ち歡樂の日なり。保羅の所謂義と和と聖靈に由れる歡樂、正しくは聖靈に由れる義と和と歡樂は、此心境を髣髴せしむるに足る。天上の國は悔改によりて始めて人の悟入し得べき者。

神の國近けりと謂ふは、猶ほ未だ悔い改めざる人々に對して放たれし警告なるも且つ同時に福音なり。蓋し審判を知らしむる方面より言へば警告なるも、歡樂を享けしむる方面より言へば福音たる可ければ也。思ふに神の國は既に來れりと言はんよりも、將た又神の國は必ず來るべしと言はんよりも、神の國は常に在りと言ふの適切直截なるに若かず。耶蘇の眞意はこゝに在りしならむも、弟子達は之を明瞭に理解する能はずして、一見前後矛盾せる如き説教を書き遺せるならん。而かも予の解釋する如くんば、審判の日の現在のなると同じく、歡樂の日も亦現在のなり。然り、久遠眞實なる心靈の天國は來れりといひ來らんといふ可きものに非ずして、全く常に在る者なり。靈覺一たび開けなば、忽然として其現前を知了せん。悲しいかな人類の眼は猶ほ未だ半ば盲ひたる者なり。肉の苦痛を避くるを知りて、靈の審判を避く

るを知らず。肉の歡樂あるを知つて、靈の歡樂あるを知らず。益くひ鏽くさる財の尊きを知りて、益くはす鏽くさる財の尊きを知らず。眞珠に代ふるに土塊を以てし、永遠に代ふるに一時を以てして、終生遂に其非を悟らず。天父之が爲めに心を傷ましむるの莊嚴なる消息に至りては馬耳東風の憾無くんばあらざるなり。耶蘇深く之を憐れみ給ひて、先づ神の國と其義とを求めよとて、一大宣言を發せられぬ。而して神の國とは何ぞや、之を何處に求む可きやの疑問は、予が如上の説明によりて幸に讀者の諒解を得たりと信ず。されど予をして猶ほ一語を加へしめよ。神國の意義と極致とを研究すべく、他に猶ほ一大典據の言ひ及ばざりし者ありたれば也。

七、神國は爾等の衷に在りこの思想

予は神の國を解して、靈的生命なりといひ、神に仕ふるの生活なりといひ、久遠眞實なる心靈の王國なりと云ひぬ。而して神の國の極致は、神的生活なるが故に、耶蘇の人格こそは活きたる神の國なりと説きぬ。予は既に幾多の典據を示して、此見解を明かにしたり。而かも予が此見解は、路加傳第十七章廿一節に於ける耶蘇自身の宣言に於て、最も有力なる典據を得べきに似たり。曰く「神の國は何れの時來る乎」とパリサイの人に問はれければ、イエス答へて曰ひけるは「神の國は顯はれて來る者にあらず。此に視よ彼に視よと人の言ふ可き者にもあらず。夫れ神の國は爾曹の衷に在り」と。若し予にして直ちに此聖句を引用し來らば、極めて簡單明瞭に、神の國の眞髓と極致とを説明し得たりしならむ。只敢て之を爲さざりし所以の者は、此聖句の原義に就て異説の存する者あるべければ也。而かも予は異説の孰れが正しく孰

れが誤れりとしても、結局予が見解は、此聖句によりて一個の傍證を見出し得べしと信ず。請ふ少しく之を語らん。

「夫れ神の國は爾曹の衷に在り」の一句は、普通に爾曹の心の衷に在りてふ意味に解せらる。斯く解すれば神の國を靈的生命なりとする予が見解は、極めて明白なる典據を得るに近し。されど此句の語學的研究に徴すれば、斯く解するの聊か早計なるを覺ゆ。さらば如何にか之を解すべき。英譯聖書には「For, behold, the Kingdom of God is within you, (or among you)」の二譯を附し、廿世紀新約聖書には、専ら「Within you」を採り用したるも、學者或は「For lo, the Kingdom of God is in the midst of you.」と譯して、心の衷を意味するにあらず、集れる人々の間を意味すと爲すもあり。或は「For lo, the Kingdom of God will (suddenly) be among you.」と譯するの一層原語に適切なるを指摘するもあり。若し此最後の譯を正當なり

予は神の國を解して、靈的生命なりといひ、神に仕ふるの生活なりといひ、久遠眞實なる心靈の王國なりと云ひぬ。而して神の國の極致は、神的生活なるが故に、耶蘇の人格こそは活きたる神の國なりと説きぬ。予は既に幾多の典據を示して、此見解を明かにしたり。而かも予が此見解は、路加傳第十七章廿一節に於ける耶蘇自身の宣言に於て、最も有力なる典據を得べきに似たり。曰く、神の國は何れの時來る乎とパリサイの人に問はれければ、イエス答へて曰ひけるは、神の國は顯はれて來る者にあらず。此に視よ、彼に視よと人の言ふ可き者にもあらず。夫れ神の國は爾曹の衷に在りと。若し予にして直ちに此聖句を引用し來らば、極めて簡單明瞭に、神の國の眞髓と極致とを説明し得たりしならむ。只敢て之を爲さざりし所以の者は、此聖句の原義に就て異説の存する者あるべければ也。而かも予は異説の孰れが正しく孰

れが誤れりとしても、結局予が見解は、此聖句によりて一個の傍證を見出し得べしと信ず。請ふ少しく之を語らん。

「夫れ神の國は爾曹の衷に在り」の一句は、普通に爾曹の心の衷に在りてふ意味に解せらる。斯く解すれば神の國を靈的生命なりとする予が見解は、極めて明白なる典據を得るに近し。されど此句の語學的研究に徴すれば、斯く解するの聊か早計なるを覺ゆ。さらば如何にか之を解すべき。英譯聖書には「For, behold, the Kingdom of God is within you, (or among you)」の二譯を附し、廿世紀新約聖書には、尙ら「Within you」を採用了たるも、學者或は「For lo, the Kingdom of God is in the midst of you.」と譯して、心の衷を意味するにあらず、集れる人々の間を意味すと爲すもあり。或は「For lo, the Kingdom of God will (suddenly) be among you.」と譯するの層原語に適切なるを指摘するもあり。若し此最後の譯を正當なり

とせば「神の國は突如として爾曹の間に現はる可してふ意味となり、現在の譯語と相距ると一見甚だ遠きも、此思想を推し詰むれば、神の國は爾曹の心の裏に在りてふ思想と、根底に於て一致するを見る。故に予は古來の通説に従ひ、「爾曹の心の裏」とも又は「爾曹群集の間」とも解釋し得らるゝ者と爲すの最も穩當なるを思ふ。「心の裏」と解すれば、此聖句は、神の國の靈的生命なることを直指すと見るべく、且つ神の國は精神的内的變化、即ち悔改によりて始めて自得すべき靈覺の世界なるが故に、物質的外的變化の見る可き者あるに非ずとの意味を包含すと謂ふべし。學者或は此語がパリサイ人に向つて發せられたるの故を以て、「爾曹の裏」を「心の裏」と解するの不可なるを説き、耶蘇は何ぞパリサイ人の心の裏に神の國ありと認め給はんやと辯するもあれど、此論太だ當らず。耶蘇の「爾曹」と宣へるは、畢竟、廣く人類を指せりと解釋す可き者

なり。素より耶蘇はパリサイ人の心の中に神の國ありとは認め給はざらん。されどパリサイ人と雖、悔い改めて新に生れなば、神の國に入る難からじ。耶蘇が彼等を眼前に置きて、神の國は爾曹の心の裏に在り」と宣言し給はんこと決して不思議と謂ふべからず。況んや耶蘇の説教を通じて「爾曹」てふ稱呼は、常に普遍的永遠的の意義を包含し、必ずしも時と人との性質に拘泥せざるに於てをや。故に予は「爾曹の裏」を「心の裏」と解して此聖句を味讀するの必ずしも不可なきを信せんと欲す。吾等の心の裏に神の國在りと云ふは、吾等の靈眼一たび開けば、忽然として神の國の到來を自覺し得べしとの消息を含蓄する者にして、聖書の他の部分にも幾多之と照應すべき思想無きにあらず。然れど「爾曹の裏」を「爾曹群集の間」と解するも亦有力なる一説たるを失はず。斯く解すれば聖句全體の意義は、自ら別殊の景趣を生じ來るべ